

世に遠い一つの小浦

—『北小浦民俗誌』の解剖学—

篠原 徹

-
- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係 |
| 2. 問題の所在と方法 | (1) 「民俗誌」のアナトミー |
| 3. 「採集手帖」について | (2) 「民俗誌」の評価をめぐって |
| (1) 倉田一郎の海府調査 | 5. 結 論 |
| (2) 柳田の読んだ「採集手帖」 | |
-

1. はじめに

世に遠い一つの小浦などというものは現在の日本に存在しないであろう。それほど列島内で人々は動き回り、その勢いは列島の内にばかりでなく、列島の外の世界にまでおよんでいとどまることを知らない。柳田国男が『北小浦民俗誌』の序文のなかで「全国隅々の、最も世に知られない小区域の採訪記録を世に残すことを思ひ立ち⁽¹⁾」と述べたことからみれば隔世の感がある。

佐渡の外海府では笠取峠から、内海府では黒姫から北を「シモの鬼国（オンゴク）の連中」と言われていたと現在海府の人が笑話にするくらいであるが、隔絶していた時代が長かったのは事実である。けれどもはやというべきかやっというべきか民俗学などが他地域のことを知らさなくとも普通の人々が自己と他者、地域性・風土の相違を認識し始めている。その意味ではこれほど多くの人々が他者の存在を知り、自己の育った環境や歴史を相対化し自己認識をしている今こそ普通の人々のそれこそ心意というものが発現してきたと考えていいのかも知れない。他者の存在を認識することなしに自己認識はありえないのだから。

この現在の心意を射程に入れずに日本文化論や風土論を説くのは噴飯物であるのかもしれない。とまれこういう状況のなかで民俗誌というのは何を指すべきなのだろうか。民俗誌とは何であろうか。柳田の方法は必ずしも踏襲されていないが、精細なる民俗誌の作成は今でも盛んに作られている。しかしそれが何を創造しているので

世に遠い一つの小浦

あろうか。

柳田は「個々の特色ある地域の記述と、その比較総合は欠くべからざる準備⁽²⁾」であるといったが、後者の目的のために特色ある地域の記述をするという柳田が用意した民俗誌のありかたが根本的なところで破綻をきたしているのではなかろうか。現在の民俗誌と称されるものは柳田の用意した採集手帖を遥かに上回る量をひとつの地域で採集したものを素材にして成立している。ただ、一人でその地域を完結した世界として描くのと、多くの調査者が分担して書くという差は無視できない差であるが。そしてその地域を描くという点では極めて無味乾燥な項目羅列的なものであって、しかもそれが比較総合に大いに役立っているとは思えないことは象徴的である。

柳田自身の民俗誌を書く作法は現在の民俗誌の描き方と異なっている。『北小浦民俗誌』は柳田の著作のなかでも異端である。その方法は柳田以後の民俗学に継承されているとは思えない。何がそれを躊躇させているのだろうか。柳田は「個々の郷土の特色が次第に目に立たず、共通一致の点のみが多くなれば、それを目的の完成と見てよいのですが、そういう時期は容易には来ぬだろう⁽³⁾」ともいっているが、現在という状況はある側面から見ればその通りであるし、そうであれば柳田の用意した採集手帖をもって調査をすれば柳田よりもっと切実に民俗の消失を憂えなければならないことになる。

しかしはたしてそうであろうか。民俗学であれ人類学であれ対象とする小区画の社会をホーリスティックに描きたいという願望は捨て切れない。対象が多様化し変容を余儀なくされているなかで民俗誌的方法的検討とその意義について考えてみたい。そのことをある意味で柳田が示した手本『北小浦民俗誌』の成立する過程と創作の秘密を書誌学的に検討することによって、柳田の民俗誌の方法の限界と継承すべき点を明らかにしてみたい。

2. 問題の所在と方法

『北小浦民俗誌』は柳田が倉田一郎の不慮の死を悼み、その豊かな才能を惜しみ彼ならこう書いたであろうと機微や推測又学識にまで立ち入って代筆したと断言している民俗誌である。つまり柳田は倉田一郎の採集手帖を精読し感嘆し、一度も北小浦を訪れずにこの民俗誌を書いた。その事情を柳田は民俗誌のあとがきで説明している。

佐渡の海府を柳田が旅したのは1920年（大正9年）6月のことである。この年の8月、最初の3年間は国の内外を旅行させるという条件で、朝日新聞社社員になってい

る。貴族院書記官長を辞任し、これ以降自由な旅を始める。海府への旅はその直前のものであった。この時の紀行は1920年(大正9年)8月「佐渡の海府」(『歴史と地理』に発表)、1932年(昭和7年)10月「佐渡一巡記」(『旅と伝説』に発表)として世に出ている。後に『秋風帖』に所収されているものである。

「佐渡一巡記」によって柳田がどのコースを通して佐渡を廻ったのか分かるのであるが、とりあえず幾つかの点を指摘しておきたい。まず6月16日に佐渡の中心地両津に到着し翌17日は何も用がないから町を歩きまわっていたが、「浜へ出てみると小舟が一艘鷺崎へ帰つて行かうとして居る。ふいと便船をして行つて見る気になつて⁽⁴⁾」と述べている。両津から鷺崎まで小型の発動船に乗り海上から内海府を見る。ここで島の道者5人と同行し姫津まで外海府を歩き、姫津から車を雇い、島の南端小木まで出て、そこから再び船で大佐渡東海岸を洋上から眺めるわけである。

6月22日には国仲を見物し何人かの郷土誌家のような人と会っている。翌23日には新潟に着いているので、この6泊7日の紀行のうち前半の旅行は一人で旅をしたと推測できる。大佐渡の印象は「此辺の見聞は後に多くの紀行類を読んだ為に、印象がごつたになつてどれまでが自分のものだか分からなくなつた⁽⁵⁾」と記し、多くの柳田の佐渡に関する文章の内容が一次資料なのか二次資料なのかよく分からないのを傍証している。

この佐渡一周で北小浦の名が出てくるのは一ヶ所であり次のような文章である。

舟には五六人の老若男女が乗つて居た。何れも親類うちらしく仲よく物を食べ、又色々の話を聴かせてくれたが、もうすっかり忘れてしまった。舟は古風に地方に沿うて走つた。あの頃はまだ珍しい小型の発動船である。丘陵が海に迫つて草花が多く、里の森は色が美しく、民家はそれに隠

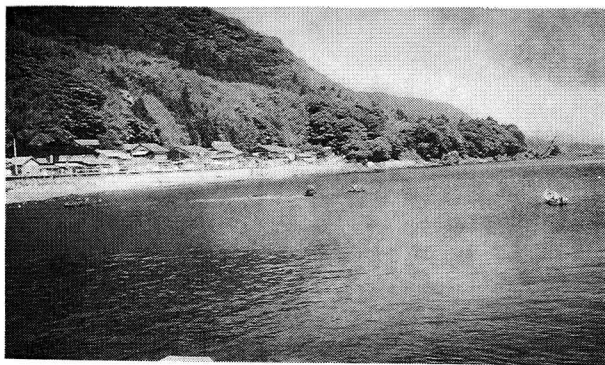


写真1 1989年6月の北小浦

新しくできた漁港の突端から撮った写真。おそらく柳田が船からみた風景もこのようなものであったろう。縮尺の論理からすれば生活の変化も消えてしまう。その意味では柳田のもった北小浦のイメージはこれとそれほど変わらないだろう。右端が古くは磯の黒森である熊野神社社叢。「舟木伐る山」で舟の材にしたと柳田が想定したタブノキが多い。けれどもタブノキは舟材としては適していないと北小浦の人はいう。静かな内海ではイソネギが行なわれていた。

れて沢山有るやうには見えない。松島弁天岩などいふあたりは殊に百合の花が目についた。それから少し手前に北小浦のあたりが、陸もひどい難所で冬分は全く交通が絶えるといふことであつた。鶯崎は至つて静かな澗であつた。⁽⁶⁾

筆者にとって興味深いのは乗り合わせた島の人々と多くの会話を交わしているにもかかわらず、このことが柳田の印象にないということである。彼にとって眼前の事実とは何であつただろかという疑問は、他の多くのものを読んでも変わらない。それでいて6月23日新潟に着くと県の図書館に行って佐渡の書物を渉猟するというをしている。又何人かの郷土誌家とも話をしている。

『北小浦民俗誌』のあとがきで「いはゆる参考書は手元にあるものが非常に乏しかつた。又恐らくはさう多くはないであらうし、有つてもさういふものを援引することは、民俗誌と名のるものの敢えてすべきことでもない」といっている態度とは異なる気がするのである。人類学が異民族の調査をする時には眼前の事実とは字義どおり眼前の事実であつて、そこからしか出発しないのはもはや常識であろうが、民俗学にとって眼前の事実とはこうした人々の言動や動作はあまり問題ではないらしい。柳田にとって眼前の事実とは郷土誌家や郷土に埋もれている書物であつたのではないのか。

後に検討するが倉田一郎たちが採集したノート自身は柳田には書けなかつたのではないかということにもこれは通じる。けれども柳田の調査ノートというのを寡聞にして知らないのではこの点については言及しない。

もう一つの点は「佐渡にはホイトといふ者が土著している⁽⁸⁾」として佐渡のホイトについて柳田はかなり記述しているが、この紀行で得た知識が『北小浦民俗誌』のなかに相当流れ込んでいるのではないかと思われる点である。もちろん柳田が倉田のノートを見て感嘆し、自らの佐渡に対する知識と不可思議なアマルガムを作り上げることは当然なのかも知れないが、民俗誌の解剖を考える上ではこのことは銘記しておく必要がある。

しかしさらに重要なことがこの「佐渡一巡記」および「佐渡の海府」には記されている点は見逃せない。後者は1920年8月に書かれているのでこの文章は佐渡から帰つてすぐまとめたものであるが、このわずかな紀行で海府について重要なことを述べている。佐渡の文献は国仲と相川に限られていて、この島の歴史について文書が少ないことを嘆きながら、小佐渡と海府についてまず次のように述べる。

小佐渡の方には其でもまだ、若干の殺伐なる記録が有るが、海府に至つては史学者との交渉が殆ど無い。史料を文字以外に求めない限りは、恐らく永く斯うであらう。手短かに申せば此方面には、鬨諍と大きな訴訟とが曾て無かつた。それを

するやうな元気な階級が来て住まなかつた。其故に欽明紀の肅慎の隈の後、特筆大書するに足る事件が何も起らなかつた。即ち話にならなかつたのである。⁽⁹⁾

このように述べて海府が記録のない世界であったことを強調している。そして海府という地名から古く海女がこの地に何回か移住してきたのではないかと推測する。この推測には証拠が乏しいばかりか反証さえあり、カネリまたはイタダキという頭上運搬の風習のないこと、次に言語風俗に殆ど特徴もないことを挙げる。

しかしその後の論理の展開では佐渡の訛言の中にラ行とダ行の転訛があり、豊後の海部などに著しい例が移住の唯一の微かな手掛かりであるにもかかわらず柳田は結局次のように仮説を大胆に述べる。

そこで自分の仮定説を大膽に述べて見ると、此島へもやはり或時代に、海部の漂泊者が辿り著いて居る。先入のみに捉はれているのかも知らぬが、海部といふ外称は偶然には起こるまいと思ふ。⁽¹⁰⁾

こう述べてこの種族の遠征力の旺盛を能登の舳倉島に対する輪島の海士町の例を挙げ、海府の最初は越後の岩船からの移住と見ている。しかしこの移住者たちも定住していく過程で、「佐渡の外海には山の幸も豊かであつた為に、いつと無く水清く日暖かな台地を拓いて、米を作つて食ふやうになり、漁業者としては一流でも二流でも無くなつた」⁽¹¹⁾とその変容を推測している。同じような推測を「佐渡一巡記」でも記しており、ここでは相川の海士町が農村になっていったという。

ここまで述べれば『北小浦民俗誌』を読んだことのある人ならわかるであろう。



写真2 北小浦の家ジルン
倉田も柳田も着目した家ジルンは現在でも使われている。

『北小浦民俗誌』の骨格は既に用意されたのではないかという疑問である。柳田の方法は実証的で帰納的なものとよく言われる。しかし柳田のこの予断に満ちた仮説に合わせるべく倉田の採集ノートは恣意的に解釈されたことはないだろうか。柳田は「佐渡の海府」のなかで「家庭の生活に親しんで見たら、或は隠れ

世に遠い一つの小浦

たる差異を見出し得たかとも思ふが⁽¹²⁾と云って海府への調査によって海部の残存たる風俗習慣の発見を熱望している。この意欲を受けて倉田は北小浦周辺を廻ったことは推測に難くないが、はたしてその採集ノートはその期待に答えたものであろうか。

もちろんこの二つの紀行文は倉田の北小浦調査以前のものである。以上が問題意識として摘出したものであるが、では倉田の『採集手帖』と『北小浦民俗誌』の関係がどのようになっているのか次に明らかにしてみたい。そのために『採集手帖』と『北小浦民俗誌』をどのように扱ったのかをまず述べておきたい。

倉田の採集ノートは柳田の強い意向を受けて1937年（昭和12年）5月から開始された海村調査の成果の一つである。これは正式には「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査」と称するものであり、『柳田文庫蔵書目録』によれば32ヶ所が調査されている。⁽¹³⁾この調査を分担した中には歴史家として最近再評価されている夭逝した大島正隆なども含まれていて興味深い。⁽¹⁴⁾

「山村生活」「海村生活」の調査の概要については福田アジオが適切な解説をしているのでここでは省略する。⁽¹⁵⁾ただ山村生活3年、その後の海村生活2年の調査の、前者については福田は「三冊の『採集手帖』間の変化に調査内容の深まりを見ると共に、二冊の『報告書』によって調査者の主体的な問題発見とその分析の努力の過程を知らなければならない」として柳田によって捨象された豊かな問題意識を調査者のなかに発見しているのに比べ海村生活の採集手帖についての言及が少ないのは残念である。この山村生活と海村生活の採集手帖の戦略的相違については後に若干触れてみたい。

いずれにせよこの『北小浦民俗誌』の解剖にはまず倉田の残した採集手帖を現在保管している成城大学・民俗学研究所において閲覧することから出発しなければならなかった。この『12 沿海採集手帖 新潟県佐渡郡内海府村 倉田一郎』を閲覧して次のような作業をした。つまり柳田は採集手帖のなかから何を採り何を捨てたのか、そしてそれをどのように組み立て民俗誌を作り上げたのか。柳田の『北小浦民俗誌』からまず倉田の採集したものを引き算することであった。そして柳田の博引傍証がどのように埋め込まれて、あのような不思議なアマルガムを鑄造したのだろうかを明らかにしたい訳である。この一種の腑分けに必要な素材としては、調べ出したらキリのない柳田関係の著作のなかで必要最小限のものに留めたかった。以下分析の対象としたものを年代順に羅列してみる。

柳田国男「佐渡の海府」1920年（『秋風帖』定本柳田国男集2）

柳田国男「佐渡一巡記」1932年（同上）

倉田一郎「12 沿海採集手帖 新潟県佐渡郡内海府村」1937年

3. 「採集手帖」について

倉田一郎「佐渡に於ける占有の民俗資料」1938年（柳田国男編『海村調査報告第1回』1938年・民間伝承の会，1984年『山村生活調査報告書』などと共に合本になった『山村海村民俗の研究』名著出版を使用した）

倉田一郎『佐渡海府方言集』1944年（『佐渡海府方言集』1977年・国書刊行会の復刻本を使用した）

柳田国男『北小浦民俗誌』1948年（定本柳田国男集25・筑摩書房）

主として使ったのは当然倉田の採集手帖と柳田の民俗誌であるが、以下倉田のものについて言及するときは「採集手帖」、柳田のものについては「民俗誌」として記述を進める。また分析の中心になったのは柳田が「民俗誌」のあとがきで「さうしてどうやら漁業の諸問題だけは、彼（倉田・筆著註）が生きて居て自ら筆を執つたとしても、多分は斯う書いたであらうといふ所まで、持つて来ることが出来た⁽¹⁷⁾」となみなみならぬ自信をみせたその部分、つまり「民俗誌」の1節「海人の村」から12節「島の牧場」までである。

筆者自身も柳田と同じようにまだ見ぬ地について書くのは気が引けるので1989年6月6日から10日までの5日間北小浦を訪れたことを付言しておく。野に咲くトビシマカンゾウの美しさばかりが印象に残っているだけであり、倉田のように精力的に採集はできなかった。

3. 「採集手帖」について

（1） 倉田一郎の海府調査

倉田一郎は1937年（昭和12年）前後2回佐渡の海府を歩いている。春4月の末頃と秋10月の下旬である⁽¹⁸⁾。春には4月29日からおそらく5月4日まで両津から外海府方面に行き、秋には10月23日からほぼ1週間今度は内海府から外海府に向け歩いている（図参照）。

「おそらく」とか「ほぼ」と書いたのは倉田自身が『佐渡海府方言集』の序文に「佐渡の海府の紹介に代えて、つたない紀行を綴った。少しかきとめた旅の備忘は、外海府に賽の積のあたりで落として了った。だから道筋の記述に或は少しの思いちがいであろうとも知れぬ」と述べているからである⁽¹⁹⁾。

「採集手帖」には外海府の記述はみられないが、この方言集には「採集手帖」の記載以外のことも入っている。柳田の「民俗誌」には明らかにこの方言集からの引用と

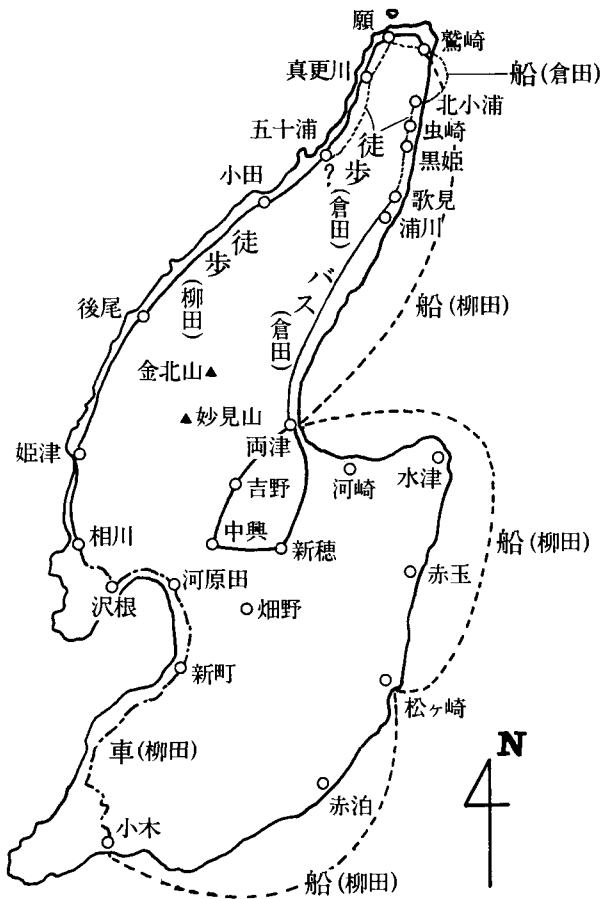


図 柳田国男の佐渡一巡と倉田一郎の北小浦調査行
 (倉田の調査行は五十浦から先の行程が不明である
 ため疑問符をつけてある。)

思われるところもあるので厳密に言えば北小浦のことかどうか不明なところもある訳である。⁽²⁰⁾

方言集には採集した場所が記載されていない方が多い。実は上述した序文のなかにも「旅の備忘」とあるように「採集手帖」とは別に自分用のノートをもって倉田は歩いてきたものと思われる。これは後述するが「採集手帖」は調査中に書かれたものではなく、柳田に提出する時それらしく転載したのではないかという伝聞が聞かれるがこのことと関係する。

「採集手帖」は乱雑に書かれていて体裁は如何にも調査中に書かれているようにみえるが、これは簡単にそうでないことが証明できる。柳田自身は当然気付くほどの作

為であるが、柳田を中心にした当時の民俗学という知の集団では黙認されたことなのであろう。しかしこれは倉田と柳田の関係がそうなのであって、すべて柳田とその弟子たちとの関係がそうであったとは言い切れない。その他の採集手帖がどうなのか調べたわけではない。

倉田は春の旅の直後に短い別の紀行を書いているが、⁽²¹⁾やはり場所と日程については曖昧である。倉田の二回目の内海府への調査を前述の方言集の序文の記載にしたがって復元してみよう。この序文は当時民俗学を志した人の世に知れぬ小浦への感傷と憧憬が緋い交ぜになった名文というべきであらうが同時に柳田に対する無限とでも思える忠誠さえ感じる文章である。

倉田は春の調査を「海府の春風」、秋の調査を「海府の秋風」と題して紀行文をものしたいと考えていたようだ。調査の前には柳田の『秋風帖』を読んでから出発したとあるが、題名からも伺えるように文章さえ柳田を模倣したような序文である。

10月23日両津をバスで出発し歌見まで来てそこから徒歩の調査になる。歌見から黒姫まで歩き、黒姫ではよい伝承者が得られずその足で虫崎まで行く。虫崎で見知らぬ老人の家に泊まり、この人から一夜の採集をしている。この人は偶然神社のカギトリ⁽²²⁾の家であったが、伝承者としてはあまり期待できなかったのが惜しまれると倉田は述べているが、ここで採集したかなりの情報が「採集手帖」に記載されている。翌日24日また歩いて北小浦に向かい、途中越中の漁師から聞き書きをしている。北小浦では北沢又造氏と旧家小出氏の家数泊したと書いている。この二人から得た語彙の資料が方言集及び「採集手帖」の主要な部分を構成しているようだ。数日後この村を出るとあるがこの日数は後ほど推定してみる。ここから船で鷲崎に行き紹介して貰った家に宿泊する。たまたまこの家の主人が6日前に気の毒な死に方をしそれを想いやって喪中の家で寂莫とした旅情を吐露している。ここではあまりに気の毒で聞き書きをとれなかったと言っている。

一泊して再び徒歩で外海府に向かうが、総じて以前の印象があるのであろう内海府の内海に似た静けさと家の櫛比した寂しい漁村を外海府の海の覇気に対比させている。外海府への縦断は弾野・願・大野亀を通る。その間百姓の老夫婦に会い老人に煙草の火を貸して貰えないかと声を掛けられたことと青大将一匹に会っただけであると述べ、寂しい旅程であったようだ。途中500石くらいの新しい難破船をみて心を揺り動かされ合掌して真更川に入る。ここで約束してあった両津の稲葉氏の出迎えを受け二人で帰るのであるが、真更川で一泊している。ここで土肥という伝承者型老人に会いこの翁の興味深い話を夜聞いている。

世に遠い一つの小浦

さてこの叙情溢れる紀行文の記載から後の分析に必要なことを幾つか指摘しておきたい。民俗の聞き書きをしたのは虫崎・北小浦・真更川の3ヶ所である。北小浦を除けばその採集は一日であり、しかも夜、数時間と思われる。北小浦での滞在日数は数日とあるのみでわからない。また聞き書きをとったと思われる人はこの紀行文の表現に「よい伝承者」「伝承者型」と意識されているように一定のタイプの人に照準を合わせている。そして北小浦を除けば日中は移動していて、民俗が実際に具現している場を観察しながら聞き書きをとっているわけではないらしいということも推測できる。

(2) 柳田の読んだ「採集手帖」

山村調査の後に開始されたいわゆる海村調査は1937年(昭和12年)5月から1939年(昭和14年)4月に終了した。日本学術振興会の補助が打ち切られたため3年間の調査予定が縮小したのである。知識人が軍国主義翼賛に脆くも敗退した当時の知的状況のなかでこうした調査が可能であったことも驚きの一つであるが、それにもまして多くの人が戦争に駆り立てられていく中で、その悲惨な供給源である僻地といわれるところにどういう心境で調査者は赴いたのであろうか。

悲惨であるといったのは構造的な問題であり、村落の共同性の政治的利用が最も有効に能動したという意味であり、僻地ほど遁走する術はなかった。構造的に上位にあった都市や階級ではまだ個人的に忌避する手段は存在した。

1989年6月筆者が訪れた北小浦で話を聞いた人は当時青年で特殊潜行艇に乗って訓練を受けた人であった。まさに死への出立の直前に死を免れた。その人の話では当時僅か30戸の北小浦で5・6人の若者が戦争によって死んだ。ここは「世に遠い一つの小浦」などではなかった。天皇制と民俗、戦争と民俗は避けて通れない問題であるが、これはひとまず措こう。

こうしてみると「沿海地方用採集手帖」の100の質問項目の最初が「村の起こり」で最後が「仕合わせな家」というのはなんとという皮肉かと考えざるを得ない。そして倉田の「採集手帖」のなかには見事というほどその時代の息吹きが感ぜられないのである。柳田への忠誠だけが存在して、質問項目解答以外の感想は何も書かれていない。その時代の矛盾や苦しみ、調査者の内的煩悶が一切捨棄されている野外調査のノートというそのものが考えられないのである。

そこで柳田に提出する故に一つの業務として行なわれた作業に違いないと推測しても間違いではなからう。倉田が別の自分用のノートをもっていたのではないかという

推測はまずここから生じた。事実だとすれば時代と懸隔したノートを提出させた柳田の思想性こそ問われなければならないだろう。調査者の感性や思想を排除して柳田は何を目論んでいたのか。

「沿海採集手帖」の緒言が柳田自身の筆になるのかどうか分からないが、いずれにせよ柳田の強い同意のもとにそれは書かれている。その冒頭では次のようにその目的が書かれている。

日本の国柄の特質をもつと深く知りたいといふ要望が、近頃大層盛んになつて来ました。日本の国民性の特色を、充分明らかにし、且つその由来を究めたいといふ機運が、今日非常に強くなつて来ました。昔から言ひ古された事をそのまま口真似したり、西洋の学者の考へた法則を、そのまま日本に当嵌めたりしたのでは、この機運に添ひ、又予防に答へることは出来ません⁽²³⁾。

この機運が強くなってきたというのは軍国主義による国民総動員への体制であつたと客観的には言えると思うが、こうした状況への迎合がここには見られる。そしてこの調査の具体的な目的を次に掲げている。

各人がその郷土の生活を細かく観察し、採集記録したものを総合して、一般民衆の生活が辿つて来た跡を実証的に明らかにするばかりでなく、それによつて本⁽²⁴⁾当に我國民の特徴を解説するのが、我々の目的であります。

前節で倉田の調査がほとんど聞き書きであつて、生活を細かく観察したものではないらしいということは述べた。又その直後に「今の村の生活を調べて、果たして昔からの生活の辿り来たつた跡がわかるかといふ疑問」とあり、今の村を調べるとあるが、少なくとも「今の村」とは戦争への狂気に駆り立てられていく生々しいものではなかつた。そして個々の村の個性を実地に調べることによって実証的なレベルで柳田は次のような構想をもっていた。

このやうに一つ一つ個性を持つた村が、いずれも日本の村であり、古くから他の民族では無く、日本民族の祖先が生活して来たといふ点に於いて、総て一致して居ります⁽²⁵⁾。

稲作文化単一文化論への民俗学内部での批判はやつと坪井洋文などによって最近唱えられるようになってきたが、柳田はこの時点では明らかに民族統合のための実証的なレベルでの答えを捏造しようとしていた。『遠野物語』や『山の人生』のなかで存在した山人への実証的な追及は完全に霧散霧消している。これらの手帖が柳田周辺の内⁽²⁶⁾部資料に近いものだけにその感を強くする。

この文章に続いて、後に柳田の方法論として問題になる周圏論が明確にのべられて

いて個性を持った村は民間生活の各発展段階の一つに位置づけられる。そのため消失を恐れて調査の急務が主張されることになる訳である。それではこの構想は1945年敗戦後の混乱期に書かれた「民俗誌」に反映しているだろうか。柳田の韜晦な文章からそれを読み取るのは至難のことだが、微妙にその主張は変化しているというべきである。敗戦後の精神的支柱の崩壊故に民俗レベルでの日本人論の必要性へと巧妙に重心をずらしていると思われる。「採集手帖」と「民俗誌」には敗戦を含んだ思潮の大きな変動が微妙な影を落としていることは間違いないであろう。それがどのようなものであるのかがここでの問題である。では柳田が感銘したという倉田の「採集手帖」はどのように書かれているのか。

倉田の「採集手帖」は数日の滞在で採集したとはとても思えない程の量が書き込まれていて、項目によっては量的に手帖が足らず追補がなされている。まず追補がなされた部分と採集されなかった項目とを見てみよう。

追補はさらに二つの質の異なったものからなる。採集手帖は100項目の質問が用意されているが、問7. 古い漁業は問101として追加しさらにそれでも足らず、110として補填している。問61. 特殊食物は前頁の項目が手帖のスペースをはみだし問62にまで及んだため追加して、107とした。この2問が量的には最も多いと思われる。

倉田の採集に多くの片寄り（当然あってしかるべきであり、研究者の関心によって変わることは当然である。これについては後述するが、ここは単に事実のみを示す必要がある）があるが、柳田はこれを民俗誌の素材にするとき問7については積極的に使い、問62については意図的に使用していない。これは他にも多く指摘できるが柳田が取捨選択を行なっているという事実の指摘だけでここは十分である。以下追加について簡明に記しておく。

- 101 問7 古い漁業の追補 さらに110へ続く。
- 102 問52 枕飯・分かれ飯・香奠の追補
- 103 問44 嫁入・初掣入の追補
- 104 問47 初宮詣・幼児葬送の追補
- 105 問61 普通の食物の追補
- 107 問62の分をここへ誌す
- 108 問34 占有の標識の追補
- 110 問7の追補

106と109は質問項目になかったもので倉田が106. 地形・其他の語彙, 109. 北小浦の民謡・諺としてつけ加えたものである。これだけを見てもこの「採集手帖」が柳田

3. 「採集手帖」について

に提出用に書き改められたものであることは明白である。その場で追補をするならば問7の追補が101と110に分離するはずはないからである。

次に採集しなかった項目も簡単に見ておこう。採集手帖を持った調査者がまさか項目の順番に聞いていったとは思わないが、採集できなかった項目を意図的に聞かなかったのかあるいは被調査者の語りの中にそれが話題に上らなかったのか不明である。100の調査項目は調査する側の頭には入っていて、話題が常にそれから逸脱していくのを軌道修正しながら話を進めることをしていたのだろう。

提出された手帖に柳田の書き込みがあるのは有名だが、この点に関しては記載のない頁の前の頁に左上に「21記載なし」などと書き込みがある。これは想像ではあるが、おそらく倉田は提出する時自分のノートを整理しながら記載していった。そして整理した段階で初めてその項目に該当する聞き書きがなかったのを見出したのではあるまいか。記載のない項目は以下の通りである。以下採集手帖には問という言葉はないが、1から100までは問という形で記載する。

問2. 功勞者 問3. 大事件 問4. 村の盛衰 問11. 網株・舟株
問15. 入漁者 問17. 定住の手続き 問18. 仲良い村・悪い村 問21. 運搬方法
問23. 出稼ぎ・遠方出漁 問32. 村の公と私 問48. 子供組
問69. 信号 問76. 宮座 問77. 神に祀られた人 問88. 神罰・通り神
問89. 神事と女性 問100. 仕合わせな家

ただ問29. 手伝い・合力は問28. ユヒ・モヤヒのなかに誤入していると注意書きがあり、問39. 異常人物と問40. 笑ひは内容上区別ができない。さてそれ以外は読みにくい字体ではあるが、手帖は豊富に書かれている。

「採集手帖」は各項目について質問の主文があって、それ以外に付問が記されている。山村用の3年間のものが年次を追うにしたがって内容に深化をみせたこととは異なり、付問・留意点の区別もない。⁽²⁷⁾ 福田アジオによれば隠居制・宮座・両墓制などその後の民俗学の中心的課題になるものの一部は山村用の3年間の調査の過程で注目・発見された問題意識であるという。海村用のものも同じような過程を経る予定であったろうが、2年間で調査打ち切りとなり、「採集手帖」も変化しなかった。

「採集手帖」の記載の事例を示して柳田がどう読み込んでいったのか検討してみよう。問35を取り上げるが、タコアナの私有についてである。

- 35 家, 屋敷, 田畑その他の財産はどのやうに継承分配されますか。
以前は長男のみに譲られたか, みんなに分配されたか。
長女の養子に相続させるとか, 末子に相続させる等の風はなかつたか。

世に遠い一つの小浦

△ ▽○タコアナ, タコセともいふ蛸の棲息する穴は昔は個人の私有であつた。よく他人がこれを侵す。すると持主が自分のものだ主張する。侵したものから、どんな形の穴がどこにあるか、どちらをむいてあるかなどをきいて、そのとおりなら退く。タコアナは子にゆづつた。(虫崎)

○相続はすべて、長男のみにやる。(虫崎, 北小浦)

(「12 沿海採集手帖新潟県佐渡郡内海府村・倉田一郎」より。ほぼ手帖の記載どおりに転載した。)

この事例は特別なものではなく、長短はあるがこうした作法で報告されているし、このような記号の書き込みがある。調査者・倉田の作法からみても、各項目全て文章の終わりに括弧で採集場所を明記している。そしてその地名の順序は倉田の海府調査の行程と一致している。つまり黒姫・虫崎・北小浦・見立の順に並んでいる。

採集地ごとに整理され行程順に記載された倉田の文章を各地点ごとに分類し、その出現頻度を算出してみる。不明のところやよく理解できない個所もいくつかあるが、おおよそ以下の通りである。もちろん文章の長短は問わないとしてである。

黒姫	虫崎	北小浦	見立	岩首村	小田	戸地	姫津
16	88	180	2	2	1	1	1

岩首村は大佐渡の東海岸に位置するところであるので、この海府調査では歩いてないところである。おそらく岩首村出身の人の話を北小浦で聞き、書き留めたものであろう。同様に外海府の小田・戸地・姫津もその可能性があるが、これらは調査行程の帰路にあたりその場で採集したものかも知れない。しかし外海府の真更川では一夜採集しているのに出てこないから、やはりここの出身者が北小浦にいて彼等から聞いたと考えるほうが妥当であろう。隣の集落見立は北小浦滞在中に訪れているかもしれないが、この出現率からみるとやはり出身者からの情報の可能性が高い。

前節で北小浦での滞在期間が分からないと述べたが、北小浦の採集量は虫崎の約2倍であり、虫崎は一夜の採集であるから北小浦では2日ないしは3日の滞在であったと考えてほぼ間違いなからう。筆者の経験からすれば相当な量であり、村を観察する時間などなく、聞き書きを取ることに専念していて、実際民俗が具現する場など立ち会っているとは思われない。

また虫崎での採集は無視できるものではなく、ここでの聞き書きは柳田が「民俗誌」を執筆するとき北小浦として記述しているものも多い。柳田は「民俗誌」の序文

3. 「採集手帖」について

でここで出す民俗誌は天草島とか広い地域のもではなく「こちらは一つの町村の中の、又一段と小さい部落を目標として⁽²⁸⁾います」と心意気を述べているが、厳密に言えばこの民俗誌は北小浦のことだけではない。これが許容できる範囲であると判断したのは上の事例でも分かるように、採集地点の括弧書きが（虫崎・北小浦）と併記されている例が多いからであろう。計らずもこの併記自身が倉田が柳田に提出用に整理し書き改めたことを傍証するものであることを付言しておく。

次に柳田の「採集手帖」の書き込みについてみてみよう。印としては4種のものがあり、○・▽・△・∨である。柳田は「その手帖を誰よりも先に精読して感嘆し」と「民俗誌」のあとがきに書いているから、この文面では少なくとも郷土生活研究所同人なら誰でも閲覧できたように読み取れる。はたして実際はどうであったのかわからないが、こうした書き込みを彼だけがしていることから考えれば自ずと同人と柳田との関係は類推でき、柳田が同人のなかで特権的な地位にあったことは間違いない。これはいまさら言うまでのことではないであろう。

郷土生活研究所同人による採集手帖160冊も全て柳田が目を通し、書き入れをしてあるのがほとんどであるという。⁽²⁹⁾牧田茂によればカードに採るべきものには▽、問題点のあるものには△、間違いだというものには×、賛成すべき説には○が印されていると言っている。最近佐藤健二も柳田の読書について書いているがその中の注で多くの人の柳田の朱筆について⁽³⁰⁾の経験を紹介している。これによれば同一の印についての意味については異同があり、いつも決まったものではないようだ。

倉田の「採集手帖」については○、▽が圧倒的に多い。そしてこの印のものが「民俗誌」に多く採用されていることからこの二つは、柳田が採用した民俗語彙であると考えていいようだ。この印が手帖の上部に記されているので断定はできないが柳田が着目したのは民俗語彙とその意味である可能性が高い。全てではないが倉田の報告も民俗語彙を始めに書き、それを説明するという方式が多く、その先頭に印が付くという具合である。そして○と▽では前者が多く、後者は少ない。そしてこれは証明できることではないが、この区別をみていくと次のように類推できそうである。つまり○は柳田が既によく知っているか、あるいは妥当だと判断した民俗語彙であり、▽は未知であったかカードに採るべく着目すべき語彙ではなかったかという類推である。

その理由は例えば「民俗誌」に4節「ナシフリから鏡へ」という章があるが見突漁における海底を見る手段の発展を取り上げナシフリという語彙に着目し海面を平らにする方法の漁民の工夫についての説明で、採集手帖のナシフリに関連する▽印の部分を積極的に使用しているからである。柳田にとっては新たな語彙は新たな発見であ

世に遠い一つの小浦

り、これが刺激になってあの語彙の連鎖反応とでもいうような文章を書かせている気がするからである。▽印は柳田にとって重要な意味をもっている語彙と判断したのではないかという類推は上記のことだけではなく他でもいえることであるが、それは次章で再度詳しくみたい。

問題は△の記号であるがこれは量的にはそれほど多くは出てこない。牧田の解釈では問題点があるものとなるが「民俗誌」と「採集手帖」の関係のなかでそう解釈して整合的であるのかそうでないのかをみていけば分かるであろう。この印のあるところは25箇所あるがそのうち先に挙げた事例も含めて3箇所紹介しよう。問43.「娘仲間のつきあひのうち、主なることをお話し下さい」と主文の質問がなされているところの一部である。

カルサン（からさほ）で、麦うちをやる頃、佐渡おけさなどを唄ひ、その帰りに若い者同志と一緒にゐるのを楽しみとして、男が女をひいて小屋へ入つたりする。盆、暮に男から手拭をくれる。女からは男へ、餅などを隠しておいてくれ、男もよその祭などで貰つた梨などをくれる。娘は男の口ぶえをよく聞きわけける。次は問52.「死亡直後に焚く飯に関する作法。その始末。別れ飯を食べる範囲」という質問の解答の一部である。

死者は木綿の着物を前のかき合わせを反対に、二枚きせ、コテ、脚絆、ヒボを反対につけたタビ、ジサツブクロ（三角形）にキビ、アワ、ソバ、鼠の糞などをいれる。鼠の糞はこやしだといふ。

鼠の糞がこやしであるという伝承に対して柳田は疑義をもったものではないだろうか。あるいはジサツブクロという民俗語彙を初めて耳にして疑問に思ったのか。前者の解答では娘が男の口ぶえを聞きわけけるという文章の上に△があり、よくいわれるように柳田の性に対する過剰なほどの嫌悪が「民俗誌」から抹殺する理由であると言えないか。筆者などはこの口笛で聞きわけけるということは大変おもしろいと思うのだが。

最初の事例として挙げたタコアナはここで述べた二つの例とは異なって倉田の採集した伝承という事実を柳田の論旨にあうように微妙に変奏させて登場させている。柳田のその部分の文章を見てみよう。

佐渡の北小浦などでは、そのたこ穴をタコセとも謂つて居る。ここでも子に譲つたといふ話はあるが、それは相続といふほど公けのもので無く、大抵はもう働けなくなつた際に、子供を連れて行つて其場所を教えて置く程度で、むしろ山中の松茸シメヂのシロなどゝ近いものだが、それでもあれは誰それのタコセだと知られて居るものでは、捕つた蛸を取上げられることもあつたといふ話である。⁽³¹⁾

4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係

これはこの前に飛島の例を挙げ、蛸穴は親から子に譲るが、それも母から娘への相続であり女の海人の文化の名残りという論理の脈絡上北小浦を曖昧にしておきたかったからと考えられるがどうであろうか。筆者自身の調査でも柳田の言うようにそれほど明確なものではなかったが、柳田は訪れもしない場所の採集手帖を自己の蓄積した貧乏な知識で解釈してしまう。この△についてはおおむね「民俗誌」の素材としては無視するか使用しても柳田の論理の展開に合わせるべく歪曲されているとみてよい。柳田は素材を微妙に変奏させることを繰り返し、やがて換骨奪胎してしまう名人であった。

最後にVという記号についてであるが、これは今まで挙げた事例のなかには存在していないが、これも多く使用している。次章でその例が示すが、この記号は多く今まで出てきた記号の上、つまり手帖の端に付けるか文中の民俗語彙の横に付けるかいずれかの場合が多い。この記号を付けられた文章や語彙は「民俗誌」のなかにも多用されるので、少なくとも否定的な意味合いはもっていない。

そこでこの記号は今までの記号と重複することも多く、記号の位置も特異的なことから柳田は少なくとも2回はこの「採集手帖」を読み、さらに若干強引に考えるならば「民俗誌」を書こうとした時に必要な箇所として印したのではないだろうか。

こうして倉田の提出用「採集手帖」の作法とそれを読んだ柳田の読書方法についての作法がかなり明らかになった。そこでこのようにして読み込んだ「採集手帖」を柳田は生活や思想に地核変動を引き起こした敗戦という未曾有の経験の後、つまり1937年の「採集手帖」から11年目、1948年にどう「民俗誌」を書こうとしていたのか。

4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係

(1) 「民俗誌」のアナトミー

民俗誌は一人の調査者が対象となる小区画の地域の人間集団がもつ自然的・文化的・歴史的関係の総体との生身の格闘の結果描き出す小世界像の一つにすぎないとすれば、柳田の「民俗誌」は当初から問題にされることはないはずである。しかしそれにもかかわらず柳田の「民俗誌」は何故に評価されるのであろうか。海上から眺望した佐渡の小浦への想いと自家葉籠中のものにした「採集手帖」を手にした柳田はこの民俗誌で何を描きたかったのか。諸家の見解は後に述べるとしてここはまず「民俗誌」そのものの解剖から始めよう。

前章でみたように最も世に知られない小区域の採訪計画の目的は国民統合への民俗学的根拠を捜すことであった。倉田の不慮の死による偶然はあったにせよ民俗誌作成という現実の前でどうその目的は変化したか。採訪記録を世に残すことは柳田個人にとってとはとても実現しないと諦めていた若いころからの夢であったという。「新たな時勢が之を可能にし、又極度に之を必要にした」と「民俗誌」の序文で記しているのは、敗戦後の日本の混乱が古い生活を一変させてしまいそうな情勢であったからであろう。

柳田は「民俗誌」の中に北小浦に仮託して巧みに自らの歴史観を忍び込ませているが、柳田の民俗に見る歴史観というものは次のようなものである。

歴史に志す者の目に留めてよいことは、今までの多くの改革は、実は追加であり添加であつて、何か新旧のよくよく両立し難い場合にも、なお其抵触の最も少ない部分に於て、以前の様式の片端を、殆ど無意識にも保存しようとしている⁽³²⁾。

民俗が緩やかに変化していく中に変遷の跡を見るという基本的な方法が瓦解しような気配を読みとっていたのである。戦後の柳田の目に映じた改革は追加でも添加でもない。一種の地核変動である。生活や思想の地核変動は今でも続いていて柳田が用意した民俗学的な知のパラダイムは崩壊している。柳田が「動乱の十数年の間に、さういふ親切な故老は次々と去つていきました。僅かに留まつた者も見当を失つて、ただ嗟嘆をこととして居ります。進取追随の気風は一世を蔽ひました⁽³³⁾」と嘆いてみせた社会変動は今度は高度成長という経済的変動を震源としながら日本社会を揺さ振っている。

しかし民俗社会の研究は依然として可能である。ただ柳田が執念をもって収集しようとしていた民俗語彙はかなり消失したであろうが。ともあれ戦後の柳田の民俗誌を編む目標は時代の趨勢によって変化している。国民性の民俗学的根拠の追及から民俗消失の危機を憂う立場への変化である。戦前の柳田の学問がマイナーであったにせよその中で補完的な役割を担っていたのに対して、戦後は真性なる意味での負の近代人として顕在化してきたといってもいい。

柳田は方法について二つのことを骨格に据えていた。民俗語彙の編纂と1935年（昭和10年）以来の郷土調査である。この二つは補完的な関係にあるのだが、「民俗誌」の素材になる採訪はどのような戦略であったのか。

是は比較的交通に恵まれず、且つ是まで省みられずにあつたいわゆる辺鄙な土地を選び、やや長い日数を費やして精細なる視察をくり返したもので、問の出し方とか、又話の聴き方とかに、可なり念入りな用意をもつて掛りました⁽³⁴⁾。

倉田の北小浦の調査が「やや長い日数を費やして」且つ「精細なる視察をくり返し

4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係

たもの」でないことは前節で実証したとおりである。調査方法にインテンシブ・サーベイとエクステンシブ・サーベイが対比され、その目的と長所短所がよくいわれるが、柳田の「民俗誌」作成のための採訪は依然として紀行的調査にすぎない。つまりこの補完的な方法といていたのが実は同一のものであると思われるのである。民俗語彙の収集こそが唯一柳田の欲しかったものである。

現在の民俗誌の作成が民俗学内部でも盛んに行なわれているが、項目を分担する人が増加していることの違いがあるが基本的には柳田の方法となんら変わらない。民俗誌は一つの小世界像であるが故にそれがたとえ項目をすべて網羅したものであろうとなかろうと、本来一人に帰属すべき性質をもっている。調査すべき項目の記されている採集手帖をもとにする民俗誌は所詮民俗誌ではない。民俗誌はもっと多義的な内容をもつものである。民俗誌は他人が真似ることのできない個人と調査地の世界との対話の産物とすれば、柳田は黙して語らない採集手帖そのものと対話したのであって北小浦の社会と対話したのではない。そこに柳田の倨傲があるが、その倨傲を支えたのは、膨大な民俗語彙による日本の理解であった。では実際「民俗誌」はどう作られているのか。

次に挙げるのは「民俗誌」の前半によく使用された「採集手帖」の部分である。問7・101・110は「古い漁法」に対応する採集で、倉田が書き切れなかった部分を101・110として追加したものであるが、110は船のことと大謀網について記載されているが論旨にそれほど関わらないので省略する。

問7 古い漁法

7 古く行われた漁法の、主なるものを伺ひたい。

釣漁、突漁、その他の起源について、何か言ひ伝へがあるか。

採藻、捕鯨、海士作業についても知りたい。

- イソ、イソネギのこと、六七間にみゆ。(虫崎)
- ▽ ○タコセの私有のこと、三五間にみゆ。(虫崎)
- イソネギはツキヤスでつきとり、また蛸を穴から出すに
- ▽はサグリヤス、ユスリともいふもので。この作業は
- ▽明治時代ではタランといひ、魚油を用ゐて波を風がせた。アブラをフルともいふ。大正の初め、明治末からガラスを用ゐはじめた。(虫崎)
- 海士は男だけがやる。(虫崎)
- イソネギは冬至から、新三月一杯、タコ、鮑、さざえ、海鼠

をとる。三本ヤスは長さ二間半、蛸突きに、サブキ

▽ 図(三本ヤス)図(サブキヤス) ヤスは隠れてゐるものをおひだす為(に)用
▽ ゐる。之は曲つてゐて、九

尺位はある。大きなものは七尋もある。蛸のゐる岩穴

▽をタコセ。イカノワタを腐らせ、之を海へふる。ナシフル

といふ。鮑はセについてゐるのをカイカギで引掛ける。カイ

カギは、シネエ(柄)にカギの曲つたのをつける。ホコネをつ

け、更に竹をつける。七尋位。サザエヤスは丸木を四つに

割り、十文字に木をさしこんだもの。ナマコは二本ヤスで

▽つく。干してキンコにする。ワカメ・アラメは二月頃モ

テとて 図(モテ) 状に木の柄、竹の柄をつけたものでとる。

三間はあらう。(北小浦) (漁業の話→101問へ続く)

→110問

101 漁業の話(以下北小浦)

○九十九夜頃、鳥賊がとれる。コイカといふ。トンボ、ヨマ、ツノで

沖で獲る。ヨマはソクともいひ、U型の竹か籐にスズ

をつけて、ツノをつくり、夜これを入れて、明りをつけておき、サブ

キとる。トンボ用ゐてくはずば、ヨマ(ソク)を用ゐる。四人

一艘で。

1

図(ヨマ)

図(ヨマ部分図)

○中サブキ。一旦あげてなげるとすぐつくのの中サブキといふ。

ツノ。 図(ツノ) これに鉄か真鍮のガザを二本つけたのを、片
手に二本づつもつ。

○ナトケ、ナツキとは鳥賊の浮いてくるもの。

○バンジョは沖へ舟を出し薦を三四枚つないで流しておく

とこれにつくから、これをそろそろ引寄せ、舟の側へつけ、舟と薦
との間へ手をいれ、上げさげしてゐると、指の間へ入つてくる。だ
からバンジョをつかみにゆくといふ。五月頃。冬は鱒網などに
とれる小さいものである。

○マスバ。十五ヒロダチから六十ヒロダチの縄で。三ヶ所にツケ(錨)

そして、トーラ(俵)にガラをつめて、ウケをつける。之をツケといふ。

ツケの間に縄をはり、その五六ヒロ毎に籐をさげた棒に二ヒロ

のスズをつけたマスバリをさげる。餌はユハシ(鱒)を半

半分にきり、尾を上にして、鉤をかくしてつける。鉤六〇モチ

を一人ムムとする。朝出かけてゆき、餌をかへる。かうしてとれれば

タモでとる。新三月中頃から八十夜頃まで。十四五年前からはじめた。

- 春正月頃から沖で、ハナドリや鮫でかためたイワシの上に、カゴメ、ハナドリがついてあるのを、ヘタでみてみてみつけると、イワシダモをもつて出かける。この魚群をタカリといひ、魚によりイワシタカリ、コウナゴタカリといふ。

図(イワシダモ)

このタカリを掬ふ。十年前からコウナゴはとんとみなくなつた。

- 2 ○イカアミは一網百円。サイカともヤリイカともダラサルともいふ。耳がケンサキみたいで、手の小さいものをとるに用ゐる。
○風や潮のこと。「アイのこわぶき、ヤマセのもと」。カミニシ強く

図(風の呼称)

ふき、シモニンに変わりたるときに寄る波をヨリ。東風によつて起る波をヤマセ。南から北へゆく潮をクダリシオ、北から南へゆくをノボリシオ。東から西へゆく

潮をコミシオ、その反対をデシオ。サカジオは風向と波向と反対のこと。アイノカゼになると、魚が騒ぐ。釣りでもこれは秋から冬にかけて多い。また、クダリシオになると魚が▽とれなくなる。これは春の彼岸まで。風がよくなる。

- 漁場をリョウバ。イナダが一貫目足らずになるとフクラゲ▽といひ、二三貫目となると、ブリといふ。アブラメのことをバクトウといふ。

- フクベアミ。このフクベアミは十二月の鯛、正月の烏賊をとる為三十年前から入つたもの。八フシ(五寸につき)九反もの。

図(フクベアミ)

フクベアミはイカ、イワシ、サバの如きウキザカナのために用ゐる。

- ヤビキの祝。フクベアミなどの四隅の大きなアバ。神様扱ひ。大引のは六七百円かかる。ヤビキをたてると、うちで酒を出す。
▽ヤビキの祝といふ。かういう網の漁は小さいものでもセンドウ、トモトリカコ二人の四人位からである。

- 夏イカは簀でほし、冬イカは竹にさし、オガラで耳のところをひろげてほす。

- ▽○Vサンバはアミオコシブネともいふ。テントの大きいもの。七尋×八尺位のもの

- ナメ。船引あげ用のデンギのこと。

- セニノセタ。坐礁するの意。

世に遠い一つの小浦

○波の名は、風の名に同じ。ヤマセ、ヤスモン、シモヤスモン

といふ波と風との如し。

▽○セ、ヒラセ。海の磯

○スナバラ。砂地、ガラは砂利地。ガラハマといふ語あり。

▽○クリ。沖の魚のつく礁。例へばアカラグリとはアカと

いふ魚のつくクリの意。

○タチ。水深をいふ。例へば「幾ひろ～」

○ナダ。波打際。

▽○ダイナン、ダイオキ。遙かな沖。

○ヘタ。ナダよりさきの海面。

○イソ。三、四ヒロダチの所。

○釣はみな魚の名をつける。

○イソナハ。鰯、烏賊の肉をきり餌として、イソで延え、沈め

ンジュ、チンダイなどをとる。

○カチ。網の染料。昔はカシハギの皮で染めた。柿

渋もよいとされてゐる。

○トヅクリ。網修理。

○マクラバコ。道具箱ともいふ。各自のもつ沖箱のこと。

▽○カゲ。魚の鰓。フトは魚の胃袋。

○エサバは両津へゆくとゐる。

(第110問へ続く)

(「12 沿海採集手帖新潟県佐渡郡内海府村・倉田一郎」より問7・101をほぼ手帖の記載どおり転載した。ただし図については漁具の簡単なスケッチなどが記されているが省略した。)

「採集手帖」に記されたさまざまな記号については前述したとおりである。この手帖が整理してから提出されたものであることも既に述べたが、その段階で倉田が民俗語彙ごとに説明するというスタイルを採ったことがこの記述法で理解できる。別に倉田は『佐渡方言集』を自分用の採集手帳から民俗語彙を中心に編んでいて、そのスタイルからも民俗語彙収集こそが中心的な調査であることがわかる。

若干の取捨選択はあろうが、北小浦周辺の自分用の採集手帖もほぼこれに準じたものであったろう。フィールドノートへの記述法は個人の癖とか方法があってそれ自身は技術的な問題であるから評価はできないが、普通キーワードはわかるようにするとおもわれる。この場合はカタカナ表記でそれがなされている。関心のありかたが網羅的であるので、テーマをもった調査に比べると量的には各項目の記載は少ない。

北小浦でイソネギと呼ばれる見突漁がそれほど特異なものでなく西日本の日本海側の岩礁の多い漁村にはかなり広い分布をもっていることがわかっている。筆者も見突

漁における漁法・漁具・海浜生物の関係を調査したことがあり、見突漁における技能のもつ民俗学的な意味について論述したことがある⁽³⁵⁾。けれどもここでは倉田の調査との対比は行なわない。佐渡のイカ釣り漁具の特異性を除けば、それほど特異なものでないことを確認しておきさえすれば十分である。

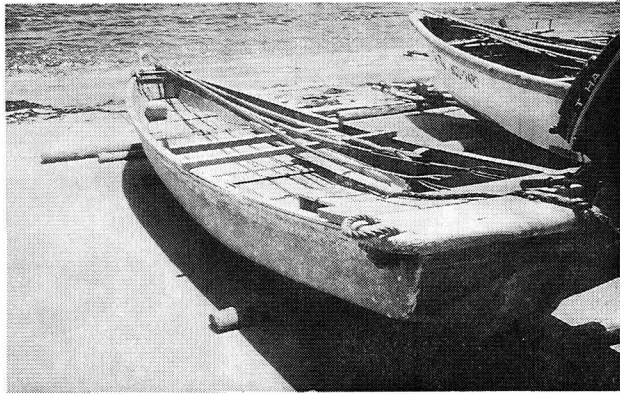


写真3 イソネギの舟と道具

船外機が付いたり、ビニールテープを補強材料に使ったりしているが基本的には道具は当時と変わらない。

ただ倉田の調査が民俗語彙とその簡単な説明だけだから語彙の背後に存在する漁法や魚についての知識などについての比較を困難にしているし、そのことを通じて始めて新旧や伝播の方向などが考えられなければならないとすれば柳田は随分独断的な判断を下していると思われる。

その中で本質的なことと思われることを一つ取り上げるとすれば、「採集手帖」には「海士は男だけがやる」という表現が一ヶ所あるのみであるが、これが柳田にかかるると壮大な移住のドラマに変わってしまうことなどその典型的な例であろう。北小浦の人々の祖先が南に故地をもつ海女であり、彼らが内海のように静かな海をもつ内海府に移住し、やがてイソネギをするようになるというもの⁽³⁷⁾。これは「民俗誌」の基調音になっていて繰り返しこれが表現を変えて前半には述べられる。これなど縄文時代・弥生時代を通じて網のおもりや釣り針などの漁具が日本各地に出土している単純な事実からだけでもお伽話に近いことは自明である。

海女という生業と見突漁という生業は歴史的連関をもつとはむしろ考えにくいのであって⁽³⁸⁾、柳田はその根拠については海府という地名以外なにも提示していない。この基調音は「民俗誌」の前半に繰り返し主張されていて、定着した海部がやがて後に来た稲作を生業とする人々と融合し米を食うように至るまで螺旋を登るように文章は新しいことを付加していく。

読書中の「採集手帖」から目を離した柳田がふと何を夢想したか、それは語彙から連想される村の創世のドラマであったのではないかと逆に筆者の方が柳田の姿を連想

してしまふ。倉田は「海士は男だけがやる」と記載しただけで本当に潜水漁が虫崎にあったのかどうか怪しい。この場合の海士はイソネギのことではないだろうか。こういう創世のドラマの筋書きが「採集手帖」からどのように析出したのか「採集手帖」を見る限りはわからない。手帖は仮説を暗示するほど漁業史に対するパースペクティブは書かれてはいない。だとすれば、ここには柳田の壮大なる虚構がある。

柳田が倉田が生きていて自ら筆をとったとすれば少なくとも漁業の問題だけはこう書いたろうと自負した1節「海人の村」から12節「島の牧場」までに一体どれだけ「採集手帖」が利用されているだろうか。1節・2節は内海府村の総人口1300人という記載を除けば利用された形跡はない。

3節以降12節までに利用された「採集手帖」の間を順番にしたがって見てみよう。実は問7・問35・問63・問66・問67・問78・101のわずか7つが利用されたのみであるが、101は問7の追補であるので同一である。そして3節から10節までは問7と101が使われ、11節・12節は問66がよく使われている。その他は問のなかの一部が部分的に使われているだけである。驚くべきことに1節から12節までわずかに二つの項目の内容が使われているのみと言っても過言ではない。つまり具体例として挙げた前記の問7が「民俗誌」の前半の物語の主要な素材なのである。それも全てではなく、恐らくあるものは意識的に削除したと思われる。そのこと自身は民俗誌が調査者の側と対象地域の人々との対話が作り上げる小世界像であるとするれば、描きたい世界像にとって不必要なものは葬り去られても仕方がない。けれども北小浦の漁民にとって重要な風・潮の記載が多いにもかかわらず削除されるのは、当時の漁業に生きる村としての北小浦を描くことと柳田の意識は大きくずれていたと言わざるをえない。具体的な例を言うと普通アナジといわれる漁民にとって悪い北西の風・シモニシは内海府で南に面しているため漁民にとってはいい風なのである。海に働く人たちが普通アナジを嫌うという感覚が逆転してしまうことがなぜ柳田にとって都合の悪いことか理解できないがこれは省略されてしまふ。

さらに倉田が歩いた1937年の北小浦はいわゆる恐慌の後であり特に山村・漁村は被弊していた。資本はこういった僻地まで押し寄せ、搾取は進行していた。その一つの現われは大謀網であり、外部の資本家が漁業権を買い取りブリを地先で捕り始めた。倉田の「採集手帖」・110にはそのことが記されているが、柳田はこれについては黙殺している。いやむしろ「民俗誌」9節「鳥と海の霊」の中に「個々の漁夫たちの空想を超越した、大謀網といふような大がまな漁撈組織でも、意外であつたのはただ金力だけで、その他は悉く小さな経験の、人知れぬ集積であつたことが、斯うして見

て行くと段々に判つて来る」とおよそ平和な僻地の農漁不可分な村の選択として「将来への大きな希望⁽³⁹⁾」と逆なことさえている。柳田の経世済民は僻地の社会の絶望を救いあげるほどのものではない。

柳田が北小浦の1937年という現在を「民俗誌」から消し去ることは、民俗学が歴史民俗学的志向をとる限り必然であるのかもしれない。しかしその民俗学的歴史像が権力や政治と無縁の如く人のいい老人ばかりで構成されている印象を与えるのは納得できない。「世に遠い一つの小浦」など当時においてすら存在しなかった。

人類学や社会学が対象地域の共時的側面に力点をおき、民俗学が通時的側面に傾斜するのは対象の認識方法が異なるので当然ではある。しかし柳田の「民俗誌」に潜む歴史はあまりにも仮構的である。柳田がどのようにその仮構的歴史を「民俗誌」に挿入したのか次に見てみよう。およそ「民俗誌」の前半どの節をとっても金太郎飴のように前に述べた基調音は繰り返されるのであるが、次に挙げるのは3節「磯ねぎとかつぎ」である。問7、問67及び101の3ヶ所（全てではなく、その中の僅かな部分である）が「採集手帖」から利用され、残りは全て柳田の博覧強記によって埋められているところである。

三 磯ねぎとかつぎ

冬の三月は風強く海が荒れて、漁に出られぬ日が外海府では多に反して、内海府の村々では、是がイソネギといふ漁業の季節となつて居た。冬至即ち十二月の二十二日^{問7}の頃に始まつて、春は新曆三月の終りまで、毎日のやうに小舟を漕ぎ出して、^{問67}章魚や鮑や榮螺海鼠などをヤスで突き、又はエゴといふ海草を採取する。それを爰では磯ねぎといふのである。海の隣の粟生島、越後の海府や能登の御崎、その他沿海各地の実状を調べた上で無いと、少しでも確かなことは言へないが、此種の漁業は佐渡に入つて来てから、又一段の発達を遂げたのではないかと、思はれるふしが有る。少なくとも地形と魚介の生態に支持せられて、他の多くの土地では既に痕跡といふまでに衰へたものが、爰ではまだ活潑に生きて榮えて居る。さうして或部分はもう絶えどになつたものが、其中にまじつても居るのである。

たとへば女が海に潜ぎ入つて、貝や海草を採り上げる作業、是を海人の唯一の生計でもあつたやうに、久しく内陸の者からは思はれて居たけれども、それが内海府の北小浦などでは、今は殆ど行はれて居ない。時々には男で海にむぐる者が、近くの部落には有るといふ程の、話より我々は聴いて居ない。此頃急に衰へたのもないやうである。そんなら海部には最初から、かつぎを得手とする者とさうでない者と、二種の部類が有つたといふか。又はこの地方に入つて来た者が海部では無かつたのか。それも全く想像し得られぬことではないが、今のところではまだそんな形跡は見出されないのである。

そこでやゝ詳しくこの土地の実例を記述して、他日遠近の各地と比較する場合の、目安を立てゝ置きたいと思ふ。第1にはイソネグといふ言葉、是は佐渡以外ではまだ私たちは聴いて居ない。ネグといふのは舟をネル、即ち漕ぐことだと思つて居る人も有るらしいが、別に海中の魚を突くことをネグスルと謂ひ、又その舟をもいふのを見ると、是はむしろ山陰地方のカナギと同じく、水底を引掻くやうな動作を意味する語で、ナグ（掻ぐ）といふ動詞から岐れたものかと思ふ。土地でも此言葉は他に用ゐられる場合が無い為に、元の起りがもう不明になつたのである。

イソといふ言葉も、土地によつて意味が少しづつちがつて居る。文学の上では「磯たちならし磯菜つむ」などゝ、岩でもあつて渡つてあるけるやうな、岸近くをいふかと思はれるが、海府の方ではさういふ処はナダ、ナダよりさきの海面がヘタであつて、その又一つさきの、海の深さでいへば三ひろ四ひろも立つあたりがイソなのである。イソから外の遙かな沖は、ダイナンともダイオキとも此地方では謂つて居る。磯とか灘とかいふ漢字を我邦へ輸入するときに、こちらの言葉をはつきりと見定めなかつたのは、京都の人たちの責任であらうが、そんな事を今言つたとてしやうがない。イソは屢々水底の隠れ岩のことに使はれて居るから、要するに魚族介類の棲む処、海に稼ぐ人たちの採取の出来る場所のことであつて、たゞ其方法が地形により、又その人々の修練によつて、追々と分化して来たのである。

問7
問10

東京あたりでいふ汐干狩、海の潮の引いた頃を見かけて、貝や海草を採りに出ることをイソと謂つて居る例は西日本には多い。それを二つに分けて、あるいて行くのをカチイソ、小舟に乗つて仕事をするものをフナイソといふのは、是も亦普通に聴くことであるが、その中間には沖なかの磯や小島に渡つて、かち立ちになつて働いて来る者もある。能登の海士町ではそれをワタリと謂ひ、宍岐の島などではシマイソと呼んで居た。岸の汀の採集が、全く無いといふ場合は想像しにくい、佐渡の内海府は海が深く、特に舟いそがよく発達して居た為に、自然にこのイソといふ言葉が、沖の方へ出て行つてしまつたのである。

イソが必ずしも海ばただけの名で無かつたことは、舟で乗出して海に潜る海女までを、イソドと呼んで居る土地があり、又彼等の身に付けるものをイソダテ・イソカブリ、その他イソマゲ・イソベコ・イソメガネなどの、言葉が有るのを見てもよくわかる。たゞさういふ土地でも作業の種別によつて、舟で沖中へ出て行く者を沖アマ又は本アマ、他の一方の岸近くで働くのをカチアマ・ダカアマ又は桶アマなどゝ称して、幾分か軽く見下げるやうな傾きが有るのは、二つを比べると前の方が労多く又収穫が大きいからであらうが、是とても海の事情によることで、たとへば九州の北部でも、遠賀郡に居る者は皆ダカアマであり、志賀島に住むのは沖アマばかりである。志摩の海岸には本アマが多いが、安房の半島では舟を用ゐぬ海女が少なくない。

大体に舟イソの行はれる区域は限られ、之に対してカチイソ即ち陸から行く採取は、どこ迄も拡張して行くやうである。是は従来この方面の生産に携はらなかつた者が、自由に小規模に真似をすることが出来た為であることは、ちやうど近世の竿釣りなども同じであつたらうが、一方には又潜ぎが相応に苦しい作業で、よほど都合な

4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係

条件が備はらぬと、拡張はもとよりのこと、維持も改良も出来なかつたらうといふことが考へられる。海女の水中に活躍する地域は、現在は甚だ限られて居る。かつて記録の上には名を留めて、既に跡無きものも幾つか有る。国の北端まではまだ移住が及ばなかつたとも見られようが、暖かい南の海などは彼等の故居であつたのに、そこにもこの漁法がもう絶えて居るといふのは、見棄てゝ去つたといふよりも、寧ろ新しい生産へ転じたのであつて、佐渡の海府のイソネギなどは、乃ちその一つの場合であらうと思ふ。海に入るといふたゞ一点を除いては、いはゆる舟イソは最もアマに近い。ヲカド即ち陸人の容易に学び取れない精巧なる技能と、海の底に就いての細かい知識とが必要であつて、この二つは女のアマと共通して居る。さうして冬三月の最も裸になりにくい季節に、つゞけて稼業の出来るといふ点は、彼には見られないこちらだけの長処であつた。海部土着の大きな誘因が、特にこの側面に在つたらうといふことを、私たちが推定するのは此理由からである。

女が海で働かなくなつたのには、別に隠れた社会的事由があつたにちがひないが、この著しい変遷を説明するやうな資料は、佐渡ではまだ少しも集まつて居ない。爰で我々の言ひ得ることは、男アマが我邦でも古い記録に先づ現はれ、決して中古から女に代つて、新たに出現したものでないといふことが一つ、次には男女の海人が入りまじつて働いて居らぬといふだけで、男が潜ぎをする例は中部以西にもなほ見られ、それが東北に向つて進むと共に、段々と男ばかりになつて行くことである。女がアマをする水面は最初から限られ、彼等の技能は其区域内で特殊に発達しては居たけれども、これを新たな海へ拡張することが、望み難かつたのではないかと思ふ。風土の制約といふことも勿論考へられる。殊に移住地には女の数が少なく、家の創設は又色々の任務を女の手委ねなければならなかつたのである。

(柳田国男『北小浦民俗誌』より)

(アンダーラインを引いたところは倉田一郎の採集手帖が利用されているところである。右端に採集手帖に対応する問の番号を付しておいた。)

「採集手帖」の利用部分には下線を付けておいた。もっと多く利用された節もあるけれども基本的にはそれほどの相違があるわけではない。まずこの節の話の骨格を整理してみると次のようにいえる。

北小浦という牛を飼い、米を作り、畑を耕し見突漁をする村がある。この村の故地は南であつてそこでは海士・海女がいてカチイソ漁をしていた。その者たちは海部として南から日本海沿に移住してきた。女がアマをする水面は最初から限られていたので新たに沖に拡張することは困難であつた。隠れたる社会的事由によって女が東北に進むにしたがい海で働かなくなり、男が次第に海士からイソネギをする方向に変遷してきた。イソネギが冬3月最も裸になりにくい季節にも稼業ができるというのが海部の土着の誘因である。イソネギは当初カチアマの形態であつたがフナイソが佐渡の内海府で発達しフナイソから男だけのイソネギに変わった。イソネギが3、4尋の水深

で活動するためイソという語彙まで沖に出て、かつてのイソはナダとなったというのである。最後の部分のような展開が最も柳田の得意とするところであるが、いずれにせよこの筋道の虚構性は一つ一つ論駁の必要もない。

この虚構は別の節でさらに発展して、こうしてできた海部定着の村に稲作を中心にした人々が別の方角（外海府）から入って来る。稲を携えた人々の来る前に牧牛の普及もあった。最初の海部の人々は焼畑という生業も持ち複合的であった。こうして人々は別の種族という根拠はないので、融合して現在があるというのである。

柳田の作り上げた物語の筋はこうであったが、この骨格の間にこの物語に整合する事例が連関想起され補填されている。少なくとも前半における柳田の韜晦な文章はこれを主題にして様々な事例や歴史における変遷の解釈が行なわれている。アマからイソネギへの転換を示す根拠すら何もないにもかかわらず、イソネギの中での技術の変遷を語彙によって繰り返している。海を平らにする方法の変遷は漁民の工夫であるといい、孤棲の土着者・蛸の蛸漁から回遊する烏賊の烏賊漁への経験の応用といい、全て海府で工夫されたことになる。

「佐渡では最近数百年に出現したことが、土地によつてはずつとそれよりも古く」⁽⁴⁰⁾と柳田がいうように彼はあるところでは個体発生は系統発生を繰り返すというような表現をとる。北小浦に舟の種類が5種存在することや、見突漁が多様な漁法の複合であることなどから、柳田は先験的に歴史における改革は実は追加であり添付であると見た。北小浦は標本であったわけである。

けれども、この移住から定着・融合という筋道は実は北小浦の「採集手帖」から産みだされたものではなく、それは「佐渡一巡記」以来柳田が暖めていた農漁不可分な日本海岸の村の成立に関する夢想であった。したがって柳田のいわゆる連関想起と吉本隆明が言った土俗の論理は戦略的で意識的なものであったといえる。⁽⁴¹⁾ここでは帰納法ではなく夢想から発想される演繹があるのである。柳田においては夢想と仮説は渾然一体となっている。柳田がここに描き出した前代の論理・自給経済の論理・抽象された村の精神史は語彙から連想される夢想であった。この夢想には捨てがたい魅力と光芒を見出す民俗誌はまず生活誌から出発すべきと考える筆者には到底容認できないものである。以上で柳田の「民俗誌」の腑分けは終了するのであるが、この民俗誌の今までの評価を概観し、結論に急ごう。

（２）「民俗誌」の評価をめぐる

柳田の「民俗誌」に対して積極的に評価しようという立場は民俗学よりむしろ人類

学の方にあるという。⁽⁴²⁾それは一つの対象地域をその人の全知識を導入しマイクロコスモスとして描こうという態度に共感を覚えるからであろう。民俗誌をエスノグラフィーと置き換えて見ると明瞭であるが、それはそれ自身として完結したものでそのままそれらを並列して比較・対比を許すようなものではないことを自覚しているからであろう。

評価を巡っては『季刊・柳田国男研究6号』に集約されているのでそれを手掛かりにしよう。その中で福田アジオが「読みものとしては非常におもしろい」と言いながら「研究としての民俗誌」⁽⁴³⁾としては評価できないと発言をするのは民俗誌に対する民俗学と人類学が指示する内容が異なることを表明している。福田のそれは一定の調査項目が一定の基準をもって、それがあがるレベルに到達したものをその対象地域の歴史的・民俗的世界の相互関係のなかで構造的・機能的に描くというもので、それは同時に他の民俗誌との対比を必然的に要請するものでもある。そして対比においても一定の操作をすれば個別の社会の個別の歴史民俗的世界像が浮き彫りになるという仕掛けである。しかしそれは調査報告書といわれるものであって民俗誌ではない。

調査者がある対象地域に漠然と赴くのではなく、仮説や調査したい内容を当然もって行くがしかしそれは眼前の事実によって動揺・変形を受けるものであり、時には調査主題の変更さえ起こっても別に不思議ではない。柳田の「民俗誌」が一定の基準をもった調査項目をもち調査された「採集手帖」をもちながら柳田自身は福田のいう一定の操作を怠ったというべきか。この一定の操作が福田においてはいわゆる重出立証法や周圏論でないのは当然である。これを行なう前に当該地域の個別の分析があるべきだというのがその主張であろう。それでは柳田の「民俗誌」が分析をする前に重出立証法や周圏論を使ったのであろうか。それもまた否定されるべきことである。これは後述するが柳田の変遷に対して用いている論理は一種のトートロジーであって論理ではない。

柳田の「民俗誌」は矛盾に満ちた文章である。採集手帖の僅かな利用と膨大な解釈は通常逆転してこそ民俗誌である。それでも魅力をもつというのはどういうことか。村武精一はその点を次のようにいう。

例の佐渡の民俗誌『北小浦民俗誌』は、僕はそういう地域社会との関連というのが、いわゆる農村社会学的な意味ではなくてまさに民俗村落論からいえば、非常にいいモノグラフになると思う。あるいは村落調査をやる場合の方法論的なものにもなるという感じがするんですけども、あれを読みますと、ご自分が調査されていないのに、あれだけビビットに、いきいきと社会組織も含めて記述され

世に遠い一つの小浦

ている。それでいて視野が、一つの村落の中だけにとどまっていなくて、先生の膨大な知識や解釈が巧まずに入っているんですね⁽⁴⁴⁾

柳田の「民俗誌」がいきいきとしたものだという感想は村の創世の物語という虚構性と関連があるが、制度や構造を民俗誌の骨格として見てその肉付けをそこに見るからであろう。確かに民俗の調査報告書といわれるものはいきいきしたものではないことは賛意を表わしたいが、これが方法論的なものにもなるということはどういうことか。その後で「一つの意味空間を持った一つの小宇宙」と「民俗誌」を評しているがそのことを指すのであろうか。この小宇宙を描くというありかたが民俗学の中で欠如している故に賛意を示したのだらうが、しかしその小宇宙は一種のコラージュで柳田の恣意的な宇宙であった。対象と格闘してできたものではない。

この『季刊・柳田国男研究6号』は特集「民俗学の方法を問う」と銘打たれ、議論は重出立証法に議論の中心があるが「民俗誌」の中では重出立証法によって変遷を明らかにするという手続きを採った上で北小浦の個々の具体的な事象について位置付けをしているのではない。伊藤幹治はこの「民俗誌」を「北小浦を一つの小さなコスモスと考えれば、そのコスモスをナショナルなレベルでとらえている点で、『北小浦民俗誌』は、これから民俗誌というものを考えていく場合にも、地域社会の問題を考えていく場合にも、一つの重要な指標になる」と評価している⁽⁴⁶⁾。けれどもこのナショナルなレベルでとらえることが問題で、その方法は吉本隆明がしみじみも言った連関想起法による無方法の方法であるにすぎない。それは千葉徳爾が擁護するように2段階の判定を含む機能的な方法などではない。

千葉は上の座談会とは別のところで地域研究として高く評価しながらその方法についても絶賛し、『北小浦民俗誌』は他の一切の彼の著作と双壁なすべき性格のもの⁽⁴⁷⁾とまで言い切っている。ここで千葉は福田アジオを批判しているが福田の意図を理解していない。千葉は「民俗誌」の方法について次のように言っている。

ここで研究方法としてとられているのは、すでに知られている全国各地の民俗事象の事例を基礎として、それぞれの事象に一つの文化変遷の尺度を仮定し、このものさしのどこに佐渡北小浦における各民俗事象が相当しているかを測定するという方法であった。つまり、個々の地域の民俗事象をもとに、いったんは帰納的な全国対比を行い、その知識を基準にしてものさしを作り、そのどの段階に相当するかもって、特定地域の民俗の発展段階を判定するという2段の順序をふむ。こうして定めた各地域の民俗を再対比して、全国的に矛盾のない場合は先の基準は誤っていなかったことになるのである⁽⁴⁸⁾

4. 「採集手帖」と「民俗誌」の関係

この文章の真意を推量するのはむづかしいが少なくともこれが2段階の判定を含むものでないことは明らかである。事象をもとに文化変遷の尺度を作り、そのどの位置に各事象が来るのかということがなぜ2段階なのか。そして再対比して全国的に矛盾のない場合というのは当然で、そのように文化変遷の尺度を作ったのでないのか。文化変遷の尺度が全国的に矛盾がないということはどうやって判定しているのか。さらに言うなら事象ごとに文化変遷の尺度が異なっていたとしたらそういう社会はどう理解していくのか。むしろこれは普通のことであるが。

通常の論理なら現象から帰納し仮説を作り、それから演繹されることがあって、それを実験なり社会に再適用して矛盾がないかどうか見るのだが、ここでは演繹されることが何も明らかではない。これは一種のトートロジーである。千葉がその例として挙げている9節「鳥と海の霊」では網の根源として4つの時の順序に従った段階を柳田は提出している。1. 魚の集合場所の発見と拡散しないことを念ずる段階。2. 捕りやすいところを集めるカリコミの段階。3. 魚の通路での待ち伏せ式の段階。4. 打瀬底引き網の段階の4段階であるが、これを千葉は技術史的に論理の上から順序づけたと称しているが先の発言の全国的事象からまず帰納してということとも矛盾するし、第一この程度のことは素朴な進化論的発想であって論理といえるようなものではない。したがって柳田がこれ以外に4節「ナンフリから鏡へ」で海を平らにする方法としてナンフリ(イカノワタ)→魚油のタラン→箱眼鏡や5節「たこ穴と蛸さぶぎ」で蛸漁→烏賊漁の変遷・累積をみたのも単純な進化論的発想であって全国的規模における帰納の結果としての仮説ではない。

村武は別のところで民俗文化の全的把握について構造分析や複合的把握では克服できるとは思わないと疑義を出して、むしろそれは帰納的諸関連からこぼれ落ちるような民俗事象を見捨てるような結果になり、そこで重大な意味世界や不可視の像を解説する記号を見失ってしまう危険を説いている。⁽⁵⁰⁾つまり重出立証法による問題発見のパラダイムの可能性を肯定しているのであるが、今までみてきたように採集手帖から解説する記号を見捨てたのは柳田の方である。もちろんだからといって福田アジオのいう「研究としての民俗誌」に与するという訳ではない。民俗誌という限りは福田にとっても調査項目そのものを解体したところから出発すべきことである。いずれにしても柳田という知の巨大な山脈の中で『北小浦民俗誌』の評価が取り沙汰されていて民俗誌そのものを対象に据えた議論ではないのではないだろうか。

5. 結 論

民俗の変遷を明らかにして日本人の精神史の暗部に迫るといふ柳田の対象への接近は必然的に民俗の断片的伝承の収集を目的化した。しかしその接近は『北小浦民俗誌』に象徴的に表われているように、対象とある距離をおいたものであった。それは一人の固有名詞をもつ人間も存在していない村の創世の物語であった。柳田はおそらく調査される側から唾を吐きかけられたり、石をもって追われるという経験はないであろう。対象との絶妙な距離のとりかたが柳田の民俗学を可能にした。

柳田が『北小浦民俗誌』の序文で「考古学などにいわゆる表面採集は、ここでも甚だしく困難なものになってしまいました」と計らずも言っているようにそれはアナロジーとしての表面採集ではなく、柳田の民俗学は精神史の暗部を発掘する準備段階のもので、語彙採集という表面採集であった。我々が知りたいのは柳田の心意ではなく人々の心意なのである。

柳田が民俗の変遷を明らかにするために民俗資料の収集を必要とし、それから要請される必然的な方法が民俗事象を伝承する個別の地方を研究の手段として位置づけることと地方の民俗研究者を民俗資料の単なる採集報告者とするという2点であった。福田アジオはこの2点を克服すべきこととした。⁽⁵¹⁾それはいかにも正当なことであるがそれを柳田やその方法を倣うものから奪回したとしても、精神史の暗部を発掘する方法についてはわからないではないか。それはまず柳田が用意し、それ以後も修正を施されながらも準備されている調査項目そのものを解体することでなければならない。民俗を否定する民俗を担う人々は実に多いのである。

民俗学の調査がどう転んでも少なくとも現在からせいぜい40～50年の時間深度をもった伝承と民俗（現在行なわれているという意味）を対象にするなら、伝承と民俗の総体が問われなければならない。とすれば先の否定的に伝承を見る人々が何故に伝承に抵抗し否定するのか、ひょっとすると今まで柳田などが考えなかった別の否定の系譜に属する伝承があるのかどうか考えてみなければなるまい。

我々が調査にいくとしばしば政治好きの人がいて、我々のするようなことを端から嘲笑する人がいるが、彼等が政治の伝承を含めて我々の知らない伝承もっているかもしれない。そうでなければ出郷の民俗など分りはしないし、近代に島やムラを嫌って都市に集まった人々など対象にさえできないではないか。伝承や昔話を嫌い自然にも背を向ける人々がいて、民俗の調査に悪罵雑言を吐く人から避難しつつ作りあげら

れる民俗誌とは何かというのがそろそろ問われてもいいだろう。

伝承や民俗を豊かにもつことが規範や権威や政治に利用され、それを担う人々がしばしばその社会のマージナルな存在であるのは、民俗学や人類学が学問のなかでマージナルな存在であることと決して無縁ではなかろう。一人で全体を記述していく姿勢は人類学の必然的な要請になっているが、これは未知の対象を理解したいところからくる要請であって、机上で作成した穴埋め問題の答えを捜しに行くのとは異なる。民俗学が仮に一国にその対象を限るとしても、一つのムラをまずホーリスティックに記述してみる魅力を放棄する必要はない。そして調査の対象として「伝承という対象」に限ると限定しても（筆者自身は必ずしも限定はせずに、近代的なるもの・現代的なるものも、全体の記述に必要ななら当然対象となると考えるが）、遙か遠い過去に起源するものでなければならぬと自らを視野狭窄の陥穽にはまることはない。しかしそれは少なくとも伝承的なるものでなければならぬ。そうでなければ民俗学という意味がないのだから。

数百年変容しながら続いているものもあれば、消えかかっているものもある。またこの四・五十年で起こった伝承もあるだろうし、伝承になりそうなものもある。伝承的なるものには老婆が唯一伝える穴埋め問題としては貴重な資料もあるが、この四・五十年のムラの伝承的なるものの全体的な記述においては戦争体験の伝承や高度成長期の伝承のほうが遥かに重要であろう。このように考えると項目羅列で調査は項目分担主義を志向する民俗学とは袂を分かたねばならない。もちろん調査者一人が全ての項目の調査をすれば解決するものでもないし、仮にできたとしても百人力という賞賛以上に出ない。またこの項目の二・三をとりあげその有機的關係を発見していくのも項目羅列に対する批判を超克することにはならない。

調査は部分と全体を複眼的に見ていくものでなければならぬ。この場合の部分とは調査の切り口といってもいいが調査者の得意とする方法でよい。全体のデッサンを描きながら部分の調査をし、その調査により必要なら項目主義的にいうならば別の項目も調査し、さらにそれによって全体のデッサンを修正していく。こうしてこの部分と全体の相互補完的な連鎖を繰り返すことによって、初めに描いた像を創造的に作りかえていく。調査すべきことは、最初の切り口以外は調査のプロセスのなかでその要請にしたがって無限則的に様々な領域に侵入していく。民俗学のなかに墓制だの昔話など専門性をいう者があるが、それは調査のなかで特定の資料を収集することが目的であることをいうに等しい。結局それは他の地域の資料を渉猟し、それぞれの項目の分布・起源・知られざる歴史を描くことに落ち着く。

では、調査とは何であろうか。それは四・五十年の時間巾をもった民俗総体を担う人間ではなくて、歴史の断片と化した史料としての人間を扱うことなのか。そうではなくて敢えて調査する項目とえば、それは調査のなかで部分と全体の関係から調査者自身の描こうとする世界にしたがって選ばれるものであろう。

描こうとする世界が予定調和的なものでなければ、原像が変形・削除・付加の手続きを経て改変を余儀なくされる。この手続きの作業は調査される人間との不断のコミュニケーションによってなされる。こうしたコミュニケーションは礼儀正しく無私の精神でインフォーマントと対峙することであろうか。調査地にあっては不用意で不躰な質問は慎み、相手を傷つけるようなことをいわず寡黙であること。これは民俗学の黙契であるらしいが、これは先の手続きから考えれば描こうとする世界は調査者との共同作業であってひとり威儀をただして聞いていて、後で客観的と称する恣意的な世界を構築することではないはずである。

民俗誌は一つの対象を一つの全体として描こうとするため、被調査者との同調・反目・否定時には憎悪を含んだ思索の過程を提示するものではなくてはならない。念入りに用意された話の聞き方とか問いの出しかたが如何にも客観性の保証のように思われるけれども、それは比較を前提にした人間の史料性のみを追及する手段であって、少しも眼前の事実ではない。それでは比較を許さないその世界固有のものがあるのかどうかは明確には言えないが、比較を前提にしない調査者との対話はありうる。相手の知識・感性とこちらの知識・感性との衝突である。習俗の無意識の保有などありえないという立場である。ありえないというより無意識化した習俗など当の人間の生きる社会にとってはどうでもよい。事物の起源や変遷を知りたいだけと言うなら別だが。

そこに生きている人々は自分達の環境・ムラ・政治・歴史・社会を対象化して見ている。つまり当該民俗社会に生きる人々は固有な分類体系や範疇・認知体系（これを発見する過程は並大抵のことではないが）に基づく民俗自然観・民俗家族観・民俗歴史観・民俗政治観として意識化している場合もある。意識化していなければ対話によってそれは発見されるべきであろう。民俗を先に付けたのはエミクな立場を強調したにすぎず、付ける必要はないかもしれない。

特にこの中で日本の民俗学が歴史学の補助学問としての性格を脱皮・克服すべきものとして捉えられていたとするならば、民俗歴史観と我々の歴史観との対置は重要である。いつまでも外部の「好意の侮蔑」と内の「謙遜なる無責任⁽⁵²⁾」に留まっているわけにはいかない。ここまで述べてきて射程ははっきりしてきた。柳田のいう三部分類の第三部、『民間伝承論』を引用すると「第三部は、骨子、即ち生活意識、心の採集

または同郷人の採集とも名づくべきもの。僅かな例外を除き外人は最早之に参与する能わず。地方研究の必ず起らねばならぬ所以⁽⁵³⁾を疑ってみなければならぬ。第一柳田は民俗社会内部に歴史観の存在など認めていなかったのではないか。これを先に仮に民俗歴史観とっておいたが、特に民俗とつける必要はないかもしれない。ただ対置すべきものとして科学的歴史観ということのをこれから予想するならば誤解というべきであろう。科学と歴史とは最も相互に極北に位置する領域で、科学的歴史観という言葉自身が形容矛盾である気がする。しかしこのことの議論はここでの問題から逸脱してしまう。もし対置するとすればせいぜい実証的歴史観であろう。同郷人が同郷人の生活意識を採集するという事は既にその社会や文化を対象化しているものを採集することである。その対象化することは外部の世界を自己のなかに投影し、それを外部に逆照射していることである。それはただ共感といった次元でしか、つまりさかしらな同郷人だけが抽出できるといったものではないはずである。

柳田が「前代論理」といい「変遷以前の考えかた」といい又「無意識の伝承」というおしなべて凡俗知識の毀誉褒貶を同時にやってのけるのは、実証的歴史観に対する憧憬に根差している。外部世界を対象化してつくる民俗自然観・民俗歴史観・民俗世界観というのは調査者のもつそれらと等置のものである。同郷人の民俗学といい、他者には渡ることのできないルビコン川のようにいうが、もしそうなら同郷人にだって渡ることにはできない代物であろう。

こうした民俗世界観がエミックなのかエティックなのかさっぱり分からない象徴二元論やコスモロジーの議論とは一線を画しておきたい。相手の知識・感性とこちらの知識・感性を等置に置くことで紡ぎ出される対話は少なくとも両者の議論の果てとして相手の自然観・世界観の確認・構築・否定のいずれかに参画しているものである必要がある。もちろん調査者の側にとっても同じことである。つまり民俗誌とは妥当性をもった、又ある確からしさを備えた一つの相互の了解である。幾多の他の事例を知っていることによって、本当はその分布や伝播が要請する仮説や変遷を意識しているに違いないのに、威儀正しくムラそのものをホーリスティックに知りたいとふるまうのはもはや偽善でしかない。相互の了解と民俗誌を規定したが、その意味で柳田の書いたお手本『北小浦民俗誌』はそれからは遙かに遠い位置にある。「世に遠い一つの小浦」とは実は柳田の「民俗誌」の最後の節から引用したものである。

佐渡の海府の世に遠い一つの小浦に、私たちが興味を寄せ、是からもなほ近づいて詳しく知りたいと念ずるわけは、ここが日本の海村の代表的な例でなく、従つて住民自らが学んで、類推によつて次第に理解し得るやうな、単純な成立ちをも

つて居ないからで、少しく誇張すれば日本といふ国の、世界に於ける立場にも似通う点がありそうなのに心を引かれるからである⁽⁵⁴⁾

負の近代人として日本人の精神史の暗部に果敢に挑んだ柳田は本当に人々の心意をみていたのであろうか。作家・中上健次が「柳田の方法そのものが、産業革命的であり、機械的であり、さらに柳田の随筆や論文が、写真やモンタージュやコラージュという表現形式と同じ型を示しているという事である⁽⁵⁵⁾」と核心を見抜いているように、『北小浦民俗誌』は柳田が海上から見て創作したまさにコラージュであった。

謝 辞

これは国立歴史民俗博物館の共同研究「民俗学方法論」（代表・福田アジオ）の研究会で1988年に発表したものを骨子にしている。この発表は倉田一郎の採集手帖を見ずに『北小浦民俗誌』のありかたを筆者自身の今後考えていきたい民俗誌との関りでも取り上げたものである。その後成城大学・民俗学研究所において倉田一郎の採集手帖を見ることができ、この論の大部分はその閲覧にほとんど依拠している。研究会での発表は結論の一部を構成しているが、その主要な論旨は変更する必要を感じなかった。成城大学・民俗学研究所によって閲覧できたことを深く感謝する。

また研究会で共同研究のメンバーから様々な批判・教示を得た。色川大吉氏には『下々戦記』を書いた水俣の運動に関わる吉田司氏の地域社会との葛藤・憎悪・親和とこうした民俗学的調査との関連性など貴重な助言を得た。今回は取り上げることができなかったがいずれ方法論の問題として比較してみたいと思う。

そして福田アジオ・岩本通弥両氏には『北小浦民俗誌』に関する文献の所在を教えられることが多かった。これらの方々に記して感謝したい。

註

- (1) 柳田国男『北小浦民俗誌』1949年（定本柳田国男集・25巻、所収、筑摩書房）p. 361
- (2) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 363
- (3) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 362
- (4) 柳田国男「佐渡一巡記」1932年（定本柳田国男集・2巻『秋風帖』、所収、筑摩書房）p. 200
- (5) 柳田前掲書「佐渡一巡記」p. 207
- (6) 柳田前掲書「佐渡一巡記」p. 200
- (7) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 454
- (8) 柳田前掲書「佐渡一巡記」p. 201
- (9) 柳田国男「佐渡の海府」1920年（定本柳田国男集・2巻『秋風帖』、所収、筑摩書房）p. 212
- (10) 柳田前掲書「佐渡の海府」p. 218

- (11) 柳田前掲書「佐渡の海府」p.218
 (12) 柳田前掲書「佐渡の海府」p.215
 (13) 成城大学『柳田文庫蔵書目録』1967年, p.54~55
 [採集手帖—沿海地方]

ここで「採集手帳—沿海地方」として記載されているのは以下の通りである。これを遂行した機関はすべて郷土生活研究所となっている。

櫻田 勝徳	岩手県下閉伊郡普代村	郷土生活研究所	昭13
〃	岩手県下閉伊郡重茂村	〃	昭13
大島 正隆	岩手県九戸郡宇部村	〃	昭13
守随 一	宮城県本吉郡大島村	〃	昭12
山口 弥一郎	福島県石城郡豊間村	〃	昭14
瀬川 清子	千葉県安房郡富崎村	〃	昭12
〃	千葉県安房郡長尾村	〃	昭13
〃	千葉県安房郡千倉町	〃	〃
最上 孝敬	東京府三宅島	〃	昭12
大間知 篤三	東京府八丈島	〃	昭13
橋浦 泰雄	新潟県西蒲原郡間瀬村	〃	昭14
倉田 一郎	新潟県佐渡郡内海府村	〃	昭12
大藤 時彦	石川県鳳至郡七浦村	〃	〃
瀬川 清子	福井県坂井・丹生郡諸村	〃	昭15
〃	静岡県賀茂郡南崎村	〃	昭13
〃	愛知県知多郡日間賀島村	〃	〃
〃	愛知県幡豆郡佐久島村	〃	〃
牧田 茂	三重県北牟婁郡須賀利村	〃	昭12
瀬川 清子	京都府北部諸村	〃	昭15
橋浦 泰雄	和歌山県和歌山市雑賀崎他	〃	昭13
瀬川 清子	島根県簸川郡北浜村	〃	昭14
大島 正隆	島根県隠地郡都万村	〃	昭13
瀬川 清子	広島県豊田郡幸崎町	〃	〃
〃	徳島県海部郡阿部村	〃	〃
武田 明	香川県仲多度郡高見島村	〃	昭14
倉田 一郎	愛媛県越智郡宮窪村 (1)	〃	昭13
〃	愛媛県越智郡宮窪村 (2)	〃	〃
瀬川 清子	愛媛県伊予郡松前町	〃	昭14
牧田 茂	高知県幡多郡沖の島村	〃	昭13
瀬川 清子	大分県北部郡佐賀関町・一尺屋村	〃	昭14
〃	大分県北部郡海辺村	〃	〃
森田 勇勝	沖縄県宮古郡平良町	〃	〃

- (14) 網野善彦「ある歴史家の生涯—大島正隆『東北中世史の旅立ち』—」1989年(『列島の文化史』6号・日本エディタースクール出版部) p.240~243

この中で網野は「若くして共産主義運動に身を投じ、権力の拷問に耐えて友を守り、獄中でキリスト教に入信、三五歳の若さで世を去った」大島の生涯を学問と人の生き方の深い結びつきをもつものとして深い感動で綴っている。筆者もこの本を読み、この人の民俗への接近方法に共感を覚えた。山男でもあった大島が飯豊山にマタギ太与治と共に登るエッセイは珠玉のものである(大島正隆「飯豊山と太与治のこと」1935年『東北中世史の旅立ち』1987年, そして、p.246~251)。寡黙なマタギと山行を共にし共感というアプローチを図らずも採った大島の民俗への接近は参与観察という無粋な言葉では言い尽くせない

いある種の深い人間への理解を示している。伝統的ではあっても民俗に深い感動を覚えるとはこういう共に行動し対話することなのだと思う。

- (15) 福田アジオ「比嘉春潮・大間知篤三・柳田国男・守随一編『山村海村民俗の研究』名著出版・解説」1983年, p. 1～26
- (16) 福田前掲書「比嘉春潮・大間知篤三・柳田国男・守随一編『山村海村民俗の研究』解説」p. 9
- (17) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 453
- (18) 倉田一郎『佐渡海府方言集』1944年(『佐渡海府方言集』1977年・国書刊行会・復刻本)序p. 1
- (19) 倉田前掲書『佐渡海府方言集』序p. 13
- (20) 例えば倉田前掲書『佐渡海府方言集』p. 52のサブキには「蛸を岩穴から誘い出す為に、竿の先へ赤い布切れをつけたもの。サブクという動詞から出た称呼。サは接頭語。引くという原義から上下に動かす挙動をいうものの如くである」と説明があるが、このサブキについては採集手帖には中サブキ、サブキヤスの採集はあるがサブキについてはない。けれども『北小浦民俗誌』6節・「烏賊釣りのガザ」の冒頭には「蛸突きのサブキは、別に一本の竿を左手に持って、その先に赤い布切れを結び付け、蛸を誘い出すと聴いて居るが、それでは両方の手がふさがることになり」とあり方言集からとったことは明らかである。また筆者は北小浦を訪ねて見突漁の漁具については実物も見ているが、サブキヤスで蛸を捕るとき別の竿に赤い切れを付けたとは聞いていないし、倉田の表現でもサブキヤスの先に赤い切れを付けたのか別の竿に付けたかははっきりしない。このような誤解は柳田のその他の文章の中でも相当あるのではないだろうか。そして微妙な事実の変奏を柳田は文章に施している。なおこの方言集には例えばイチマイヤマ・ニマイヤマなどヤマアテに関する興味深い資料(真更川採集)など採集手帖には書かれていないものもある。
- (21) 倉田一郎「佐渡の漁村」1937年(『高志路』3—7)
- (22) 倉田前掲書『佐渡海府方言集』p. 138にカギトリの説明がある。「シャケ・シャニンとも謂う土地がある。村の神社の鍵を預って世話をしている旧家。以下略」とあり、こうしたカギトリなど旧家が調査のまず対象であった可能性がある。
- (23) 民間伝承の会『採集手帖—沿海地方用—』1937年, 緒言p. 1
- (24) 民間伝承の会前掲書『採集手帖—沿海地方用—』緒言p. 2
- (25) 民間伝承の会前掲書『採集手帖—沿海地方用—』緒言p. 4
- (26) 坪井洋文『イモと日本人—民俗文化論の課題—』1979年・未来社及び『稲を選らんだ日本人—民俗的思考の世界—』1982年・未来社
- (27) 福田前掲書「比嘉春潮・大間知篤三・柳田国男・守随一編『山村海村民俗の研究』解説」p. 18
- (28) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 362～363
- (29) 牧田茂『柳田国男』1972年・中公新書, p. 203
- (30) 佐藤健二『読書空間の近代』1987年・弘文堂 第6章・読者の批判力・注, p. 307
- (31) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 377
- (32) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 394
- (33) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 361
- (34) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 362
- (35) 篠原徹「漁民とその民俗的空間」1982年(小林行雄博士古稀記念論文集『考古学論考』・平凡社)
- (36) 池田哲夫「佐渡式イカ釣具の伝播について」1988年(『民具研究』73号)
- (37) 宮本常一「海から来た人びと」1974年(宮本常一・川添登編『日本の海洋民』・未来社)この中で宮本は日本の海人の系譜について朝鮮半島系の主としてアワビ・サザエをとるものと南方系の網やヤスを用いるものの2系統を推測している。その根拠については必ず

しも明確なものではないが、少なくともアマからイソネギへの転換は考えにくい。

(38) 篠原前掲論文「漁民とその民俗的空間」

この中で筆者は見突漁が冬期に行なわれるのはアワビ・サザエ・ワカメなどの生態に関連することを述べておいた。つまりサザエ・アワビは深いところに夏移動すること、また海が濁り見にくいこと、またワカメの生育が終わり商品価値をもたないことなどの理由によって冬期の方が有利であるという主張である。潜水漁から見突き漁に転換することは生業構造の大きな変化であるし、生物の生態と技能の関係からそれが簡単に起こるとは考えにくいという立場である。

(39) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 390

(40) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 379

(41) 吉本隆明「無方法の方法」1968年（定本柳田国男集1巻・月報1・筑摩書房）

(42) 座談会「民俗学の方法を問う」1974年（『季刊・柳田国男研究』6号・白鯨社）

この座談会の出席者は関敬吾・中井信彦・桜井徳太郎・村武精一・福田アジオ・谷川健一・伊藤幹治・後藤総一郎・宮田登であるが、この座談の後半に「北小浦民俗誌の評価」と小見出しのある部分の村武の発言を指している。しかし人類学者の代表的意見なのかどうかは断言できない。日本思想史などの分野にも評価する人たちがいるというのが福田アジオの示唆である。ただ人類学を別にすれば、柳田の思想の果実のみを利用することに対してはその思想が調査というプロセス抜きで語られることが多すぎるのではないかという疑問をもつ。調査は一種の思想である。柳田をなぞることによって柳田を理解することはできても民俗そのものは理解できるとは限らない。

(43) 前掲座談会「民俗学の方法を問う」p. 46 福田発言

(44) 前掲座談会「民俗学の方法を問う」p. 45～46 村武発言

(45) 前掲座談会「民俗学の方法を問う」p. 49 村武発言

(46) 前掲座談会「民俗学の方法を問う」p. 50 伊藤発言

(47) 千葉徳爾「地域研究と民俗学」1976年（和歌森太郎編『日本民俗学講座』5巻・朝倉書店）p. 99

(48) 千葉前掲論文「地域研究と民俗学」p. 100

(49) 千葉前掲論文「地域研究と民俗学」p. 100～101

(50) 村武精一「重出立証法批判者の批判性」1974年（『季刊・柳田国男研究』6号・白鯨社）p. 78

(51) 福田アジオ「民俗学と重出立証法について」1974年（『季刊・柳田国男研究』6号・白鯨社）p. 74～75

(52) 柳田国男『民間伝承論』1934年（定本柳田国男集・25巻、所収、筑摩書房）p. 331

(53) 柳田前掲書『民間伝承論』p. 336～337

(54) 柳田前掲書『北小浦民俗誌』p. 452

(55) 中上健次「写真時代の柳田国男」1984年（『新潮日本文学アルバム・柳田国男』5・新潮社）p. 98

（本館 民俗研究部）

A Small Fishing Village Away from the World
—Limit of Ethnography of YANAGITA Kunio—

SHINOHARA Tooru

YANAGITA Kunio who originated the folklore in Japan and is still in an important position wrote an ethnography. It was written in 1947 when Japan was in the utter confusion after the defeat of the World War II. The subject of this ethnography is a village called Kita-koura, a remote place of an inland sea in Sado Island, Niigata Prefecture, where even now, approx. 30 households live on Isonegi (an inshore fishery; to catch ear shells, turban shells, seaweed, octopuses, etc. using a small boat), small-scaled paddy farming and dry field farming.

This ethnography is very unique because it was written based on the fieldnote of his student, KURATA Ichiro, who conducted the survey in 1937; YANAGITA did not make any survey himself. This paper tries to elucidate why it was possible. It is deeply linked with the issue of methodology by which YANAGITA Kunio had established the field of science called the folklore in Japan. In this paper, attempts are being made to elucidate what was the ethnography for YANAGITA Kunio, by comparing the ethnography written by YANAGITA Kunio and the fieldnote written by KURATA Ichiro in details.

As a result, a conclusion is obtained that the ethnography written by YANAGITA Kunio is a kind of thesis on the Japanese culture using Kita-koura in the Sado Island as a means of metaphor, and is akin to his other literary works. A schema, that only if the survey results are available, a person who has an extensive knowledge concerning the folklore like YANAGITA Kunio can write an ethnography simply because he belongs to the same culture, is different from the concept of the author toward the ethnography. The author believes that an ethnography should reflect the outlook on the world of the surveyer, represented in the form of communications of discord, hostility and friendship between the history and culture of a group of people at the subject region and those of the surveyer. In other words, while YANAGITA Kunio pursued the ethnog-

ographies using the comparison as the premise, the author takes the position that ethnographies should be written not assuming the comparison.